

82

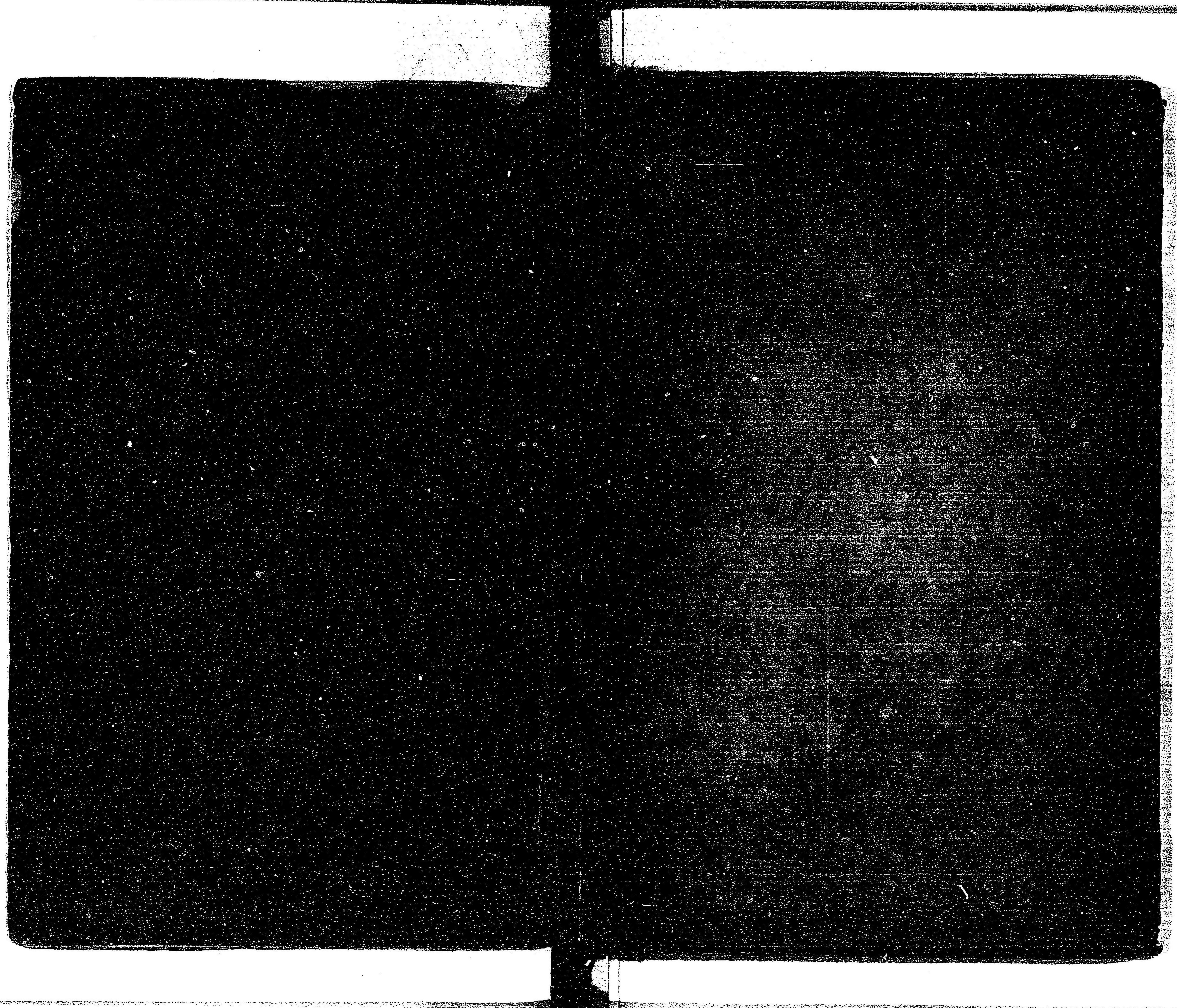
457

Ⓜ

農民の社會教育

東京八雲堂書店發行

東京大塚區大塚二丁目



82-457



余等田舎なる  
 下層農民の子弟教育に  
 任ずる者にして目撃し轉  
 愛憫の情に堪へず今や遂に吾人をして薄識短  
 才と顧みざるや  
 天の志士仁人に訴ふるところあらしむるに  
 至れりあはれ血あり涙ある人よ一讀以て吾人  
 の微意を諒せらるゝあらば吾人の滿悦之に過  
 ぎざるなり

明治三十四年霜月三日

東京 駒場の里に於て

貫外識す



目次

第一章 緒論

第二章 農民の心性

第一節 心性の固定……………五

第二節 注意力の欠乏……………七

第三節 観察力の欠乏……………九

第四節 記憶の階梯……………一

第五節 想像の誤謬……………四

第六節 概念の構成……………七

第七節 審美心の欠乏……………九

第八節 愛情の欠乏……………一

第九節 意志の薄弱……………五

第三章 農民の習慣

第十節 理想の低度……………二七

第一節 田舎の概状……………二九

第二節 太陰暦を用ふ……………三一

第三節 正月の儀式及遊び……………三二

第四節 初午及涅槃……………四〇

第五節 雛祭と札所巡り……………四五

第六節 四月八日の山登及大仙祭……………四七

第七節 五月職及半げ生……………四八

第八節 れんげ生……………五〇

第九節 七夕及盂蘭盆……………五一

第十節 八朔及月見宴……………五三

第十一節 重陽及亥の子……………五五

第十二章 鳥さて冬至其他の祝祭日……………五六

第四章 農民の風俗……………五七

第一節 服裝婦人と赤物……………五七

第二節 婦人の立姿男子の風采……………六〇

第三節 婦人の風采……………六二

第四節 食物麥に大根……………六四

第五節 住家の状態……………六六

第六節 臺所の景況……………六九

第七節 執業中の體裁……………七一

第八節 若者宿に娘宿……………七四

第九節 休業日……………七八

第十節 農事上に於ける迷信……………八〇

第十一節 祭禮の景況……………八五

第十二節 田舎芝居に花角力……………八七

第十三節 婚姻の有様……………九四

第十四節 葬禮の風俗……………九九

第十五節 農民の禮儀……………一〇一

第十六節 農民の社交……………一〇三

第十七節 犯罪と嫉妬心……………一〇五

第十八節 家庭の教育……………一〇七

第五章 農民社會の改良……………一一〇

第一節 家屋の改良……………一一〇

第二節 衣服の改良……………一一三

第三節 食物の改良……………一一五

第四節 家庭風紀の改良……………一一八

第五節 執業休務の規律法……………一一九

農民の社會教育

第一章 緒論

論

農業を改良進歩せしむる事の切要なるは今更論ずるまでもなき事なるがさて如何にして之が改良を謀り之が進歩を備すべきかに至りては研究猶淺しと謂はざるべからず人毎に言ふ物の發達は何にても教育に據るべしと子弟を教育し社會を指導する事實際物の進運を促すに相違なし然りと雖教育其者の方法にして講ぜられざらんには其効を奏する事遲しと謂ふべし農業教育の如き近年其必要を唱ふるものは誰彼を論ぜざるが如しと雖其實に至りては殆老松の影に類する者

農學博士 横井時 敬閱

井上龜五郎著

第六章 括論

第六節 婚姻に關する改良	一一〇
第七節 葬式に關する改良	一二四
第八節 宴會の改良	一二六
第九節 公會堂の設置	一二九
第十節 物産共進會の開催	一三三
第十一節 幻燈會の開催	一三四
第十二節 共同的遊戯の奨勵	一三五
第十三節 共同組合の設置	一三六
第六章 括論	一三八

あり今や農業其者の實地的研究及社會農民の指導のためには試験場あり未來農民の養成には甲乙種の農學校に農業補習學校及高等小學校の農業科ありて其局に當れる人熱心以て事に従ふあり。一見斯道隆運の徴を現すものありと雖何分農事上の改良たる一般社會の機運に俟たざるべからざるが故に到底一朝一夕の茶漬仕事にあらざるなり殊に數百年來封建的政制の下に故らに愚昧視せられたる農民の事にしあれば今如何に明治立憲の聖世に庶物煥美の光明にあひぬとて直に教育の必要を感じ改良の急務を知得せんや況や昔よりして如何に理屈を知りぬとも手足を動かさずしては稻一本作る事すら能はざるものと確信し春は八十八夜に種を蒔き五月より四十日にして植付を終へ草生ずれば草を取り水涸るれば水を澆く而して二百十日にて早稲は穂揃ふ穂熟すれば刈りてしこなし以て俵に詰むれば百姓安樂天下太平なり井を堀りて飲み田を耕して食ふ人間畢竟百姓ほど氣樂

なるものはなしました百姓ほど易き仕事はなし要はたゞむかてげじげの如く手足を動す事の巧妙なるをよしとするのみとは彼等自身もしか信ぜし處なるをやかくひがみたる頭もてる百姓の世にもめでたき維新の光明に百般事物の照り合ふ御代にいであひて心も自と開けきて立派なるものに氣を取られよき事したくなり行くものから又自百姓は收利は少く穢くもあり且つらき仕事の極なれば百姓は畢竟馬鹿の職業なり人間一生肥桶擔うて山谷駈廻るは抑意氣地なしのする事なりいでや都會に出て、華の暮しを營まんと出で行くもの數多くなり外に仕方のなきものが祖先傳來の家業なりとて止むなくつとむるといふ様の始末に至れるは抑如何なる理由にや無學なりとも忍耐勤勉家業に執着せしめてはよかりきしかも聊かの識のために田舎を厭ひ農業を忌むに至りては更に大に憂ふべきものあるにあらずや人間は畢竟進歩の動物なり智増し識殖せば俗を去りて雅に就き醜を

捨てて美に赴かんとするは人情の自然なり今の農民の生活の陋劣なる風俗の卑醜なる誰か是を都會の風雅優美なるに比して好みて田舎の生活を欲せんや未來に高尚なる農民を造らんとするはよししかも理想は境遇によりて變ずるものたる事を忘るべからず如何に考の立派なる農民を造り出したりとて現時の如き田舎の有様にては誰か好みて之が生活に甘んぜんや農民を指導して稻作の改良を講ずるはよししかも今の彼等の生活の状態を改良せざらんには如何て農業の發達を期する事を得べき眞に田舎を愛し農業を好むあらば心自發動して改良の緒にも就かんのみ詮なくして勞に服すしかも田舎には何の樂みもなしといふに至りては抑駄目なり余輩は農業教育の第一着手としてまづ農民の社會教育につとめ傍學校教育と相俟ちて彼等をして活動的傾向を生ぜしむる事の緊要なるを唱導せんと欲するものなり即此點に向ての研究を以て農業教育の先要問題となし根本的改良

と確信して措かざる所なり今や章を逐ひ節に従ひて聊意見の程を述べんとす幸に斯道教育に熱心なる諸君の御批評を辱うするを得ば吾人の光榮是に過ぎたる者あらざるなり

## 第二章 農民の心性 第一節 心性の固定

凡人間の心は外界事物の因象によりて固定せらるるものなる事は今更論ずるまでもなき事なるがとかく教育とし言へば學校教育の事のみを思ふを常とすれども社會とか自然とかいふものもなか／＼勢力ある教育者たるに相違なし田舎農民の如き自然の感化を受くること實に大なりと謂ふべし自然は實に森羅萬象變幻出沒奇態殆名狀すべからざるの現象を有す是を人事社會の現象に比すれば其現れたる形式に於ては體に複雑なりと謂はざるべからず然れども自然の現象た



る複雑は複雑なりと雖しかも彼は實に永遠無窮の態度を示し人事社會の現象に至りては時々刻々千萬變化に端倪すへからざるものありて存す故に彼は受動的にして是は發動的に彼は死息的にして是は活動的なり見給へ干山老いす萬河衰へす渺たる海波は常に渺たり巍嶽崩れて平野となり桑田變して海洋となるの時果して何時にかある自然は實に長へに不變なり此不變なる自然に此固定せる天地に身をよせて朝に星を戴きて出で夕に月を踏みて歸り如何に炎天金を熔かす三伏の候も如何に嚴寒肌を徹す三冬の節も厭はず倦ます鍬鎌相手の土地仕事に任する彼等農民の如何に自然の感化に心生活を左右せられ薰陶せられつゝあるかを見給へ彼等は實に固定せる死息の天地に醒睡して其感化を受けつゝある事豈偉大ならずとせんや人間の心は實に外界事物の因象によりて固定せらるゝ者なり活動の因象を受ければ心自活動に進み受動的の因象に接すれば心自受動的となる如

此にして農民の心性は受動的に固定せられ易きものなり

### 第二節 注意力の欠乏

心生活は常に微々たる衆活動の統合的作用を營むものなり此統合の状態より其生活に種々なる變化を生じ遂に識を生ず故に活動なきところには統合なく統合なきところには識を生せず實に活動變化は注意を強盛にし注意の強盛はやかて統合的識の成生に資するものなり注意を分ちて有意的無意的とし無意的を分ちて原始的及類化的とす而して初等の教育に於ては原始的注意に注意すへきは今謂ふの要なしたゝ其注意を養成するには(1)刺戟の適度なる事(2)刺戟の永續せざる事(3)刺戟の單調ならざる事(4)刺戟の徐々たる事(5)刺戟の順序たる事等の要因の備はるを要す然るに彼等農民か田圃を耕すや廣漠たる原野にあつては坦々として趣味なき平田中に勞役し山間谿谷に耒

を取りては前山後嶽相願望して會々禽鳥の嘯聲胡蝶翻々の状を眺むるに過ぎず此單調にして變化なく以上要因の一をだに備ふるなきところ如何で注意力の發達あらんや況や高等なる注意力即有意的注意の如きに至ては其發達實に初稚なりと謂はざるへからず凡物の發達には發達し得へき萌芽の強盛なる者あらん事を要す而して心神の發達上其萌芽の強勢なると弱勢なるとは一に注意力の強弱にありて存せり注意の赴く所或は觀察となり實驗となり琢磨となり熟練となる農事の改良進歩は實に此注意力によりて實行せられ促進せらる昔は氣樂なるものは農民たりきしかも今は農民も氣樂を以て甘ずへからず氣樂は惰眠を意味し沈怠を容合す人間宜しく活動すへし何れの方面に向つても活動的の人物たらされは得て成功すへからす農民の自卑しとし意氣銷沈以て蠢爾たるもの畢竟するに識の足らざるありと雖又以て注意力の薄きに基せざるへからず農民に注意力

養成の必要なる曰はすして明なり

### 第三節 觀察力の欠乏

人間社會の因象たる之を究むる既に難しと雖尚ほ所謂内境的觀察によりて之を推測するを得へし之に反して自然界の現象は單調なるが中に随分原因の錯綜せるものありて容易に其理を究め難きものあり科學者は之に向つて法則の發見に勉め哲學者は是に向つて實在真理の尋究に勉むありと雖しかも其現象の複雑なるものに至ては吾人の認識を超越す況して觀察注意の至らざる農民が如何に其眞を究め其理を悟るへけんや彼等は自然に處し自然に作動すしかも彼等には其複雑なる因象の一斑をも理解すること能はざるなり彼等は赤き土黒き土何れもそれ土なり厩肥に灰肥それまた何れも肥料なり深耕が何故に甲地に利益ありて乙地に不利益なりしか苗代の水何故に晝淺く

して夜深からしむへきや彼等は殆無意識的に先人の行動を真似て作動するのみ氣象は實に作物のために大なる影響を來すものなり然るに一天掻き曇りて黒墨を延へたらんには彼等はたゞ降雨のために作業に支障を興ふるあらんを恐るゝのみ園藝物の保護灌水の加減は彼等の必しも問ふ所にあらず又彼等は日中の驟雨は作物のために有益なる事を悟れとも日中の撒水の却て有害なる所以を究めざるなり彼等は植物の倒るゝあるを見るや一に以て出來過に歸し未以て黴菌のため害虫のため潜水のため日光不足のためたる事を知らず誠に香氣の至なり思ふに彼等は注意觀察の力に乏しく研理探由の念に薄ければなり農業の事たるあらゆる天地の自然物に干繋す觀察經驗の必要なる言はずして明なり抑觀察は注意の傾動によりて觀念の聯合類化の作用となり従て興味喚發疑問の生成となる實に觀察は疑問注意類化興味比較概念等智

識確立の要素を生むの母にして彼等があらゆる自然界の事實を遺漏なく直觀し得て以て作物栽培上其宜さに處するの導師たり世に所謂老農といふは即農事上あらゆる方面に亘りてよく注意觀察の行き届くものをいふ實に觀察力は注意力の養成と相俟ちて共に改良進歩の基礎をなすものなれば試験場の技師或は巡回教師たるものは實地につきてよく彼等をして注意觀察の傾向を生せしむる様に勉めざるべからず

### 第四節 記憶の階梯

記憶の活動は幼少の時に於て強く十二才前後に於て最強なるを常とす爾來年を経るに従ひて漸次減少し他の心的活動之に代るものなり記憶は幼少の時よりの練習によりて其力が發達するものなり若自然の儘に放任して更に注意する處なくんは記憶は甚薄弱なるものとな

り了するなり記憶の要因には確實なる觀念の把握なかるへからず而して又容易く再生し且處詰するところなかるへからず記憶には器械的記憶論理的記憶人爲的記憶の三種あり兒童或は未開の人間には器械的記憶の外甚僅に論理的記憶を有するのみ農民も亦多くは之に屬す彼等が諸般の事項殊に彼等が都會地方及中流以上の間に行はる言語を習得するに全く無意味に器械的に把握するのみ故に彼等は之を用ふるの場合及發表の連關を誤り殆滑稽に類することあり彼等は時々村役場或は區長より諸種の事由によりて召喚せらるることあり其使者は發令者の言を其俗に記憶して之を傳ふ然るに傳へられしもの其何の意味たるを了せずたゞ器械的に記憶するのみ故に不圖其事を忘れて家内に尋ねるも家内亦之を忘る甚しきは其何日の何時に參集すべきかをも忘ることあり又彼等は思慮することを好まず故に觀念の把握には誠に薄弱なるものあり從て之が再生もなく處結も

なく全く忘失すること多きなり殊に彼等には分業の利用を知らざるがために家の内外何仕事を問はず皆各自思ひ／＼に全體に關係して心を勞し口を利き裁判をもつ主人庖厨の纏頭を持つかと思へば主婦は畑仕事の指圖に嘴を入る子供は自然にほりまくられ老人は不自由のため小言を謂ふかゝる有様なるがために心自ら沈靜を欠き理念に遠り從て記憶力は發達せざるのみか年壯なると共に全く記憶し難きに至る彼等に共同作業と擔任作業との別を明ならしめ規律整然練々として餘裕あらしむるもの以て記憶力養成の一助ともならんか記憶の補助には其他種々の法あり(1)反覆練習は記憶に欠くへからず(2)觀念認容の際注意と興味とを強起せしむること必要なり(3)觀念の内容を明にし思慮判斷をなさしむるを要とす(4)心情の沈靜を謀る事は最必要なり心情の沈靜を謀るには精神も身體と同じく使用と休眠とを適宜に行ふべし所謂世の事一切を打ち忘れて愉快の感想に耽くる

といふことは意識の活動を休止するの意にして記憶養成上實に最要の條件たり請ふ彼等をして今少しく精神に練々たる休閑を興ふべし

### 第五節 想像の誤謬

農民は自然界の單調なる現象をば殆無意識的に直観するを以て其經驗觀察は至て少く精神界の内包亦甚狹隘なるものなり従ひて我の觀念未充分に發達せざるを以て心の作用を己れ自意志もて支配する事能はざるものあり故に彼等は實際の事と虚構の事とを辨明區別する事能はず従ひて誤想迷信に陥る事甚し實際彼等の言ふ所行ふ所及意志する事に就きて見れば實に奇妙なる考或は全く取違ひたる心を有するもの多き事を認むへし今彼等が誤想によりて一大椿事を惹起したる一例を擧ぐれば明治六年學制發布の當時なりきとか島根縣能義郡安田村宇安田關に檜原峠といふありて伯耆國より出雲國に通する

要路の一なるが時恰も炎天夏時に際し二人の洋服をつけたる鬚生の男風を入れ濁を盥せんものと其峠坂なる一茶店に憩ひき店婦以爲く不思議なる服きたるものかなそれか所謂戒服ともいふへからんかと恐るゝ問うて曰く皆さんは何をなさる御方にやと答へて我々は教育者なり子供を扱ふものなりといふ主婦教育者といふ語を解し得ず直に以て子取りとなし驚く事限なし走つて隣人に告ぐ犬傳漸く擴りて衆庶恐懼を生じ各手に鋏斧を携へて寄り集ひ遂に彼等二人を取り巻きて石をほり水をまさ無暴にも斧鋏を以て毆打し殆半死に至らしめ尙幾百人の子取が伯耆に入り込み居れば何時にやつて來らんとも謀りかたしなと浮説紛々區長は遂に各區産土神社の境内に衆民を集めて各戸二本つゝの竹槍を作らしめたりといふ蓋彼等多くの農民は昔話に唐の南京といふ處にて皿を造る其油料は人間の油を用ふ殊に子供の油か最上なりとて子供を取るとあるを確信せるに恰もよし外

人か諸港に上陸してどこともなくやつて来るとかいふ時代なりしを以て時と謂ひ彼等の服装といひ又彼等の言といひ誠に子取りと誤らしむる原因とはなりたるなりあとにて聞けば其人々は宇賀莊村の清水寺に参るなりきと實にとんでもなき騒と謂ふべし又明治二十七八年日清戦争の當時なりき外國軍艦が國旗を揚げずして美保關地蔵鼻沖を巡航する事毎度なりとの噂なりしを以て伯州米子在のものは境沖に漂泊せる商船を見て外國軍艦なりと誤認し異國の軍艦が境沖に着きて盛に黒烟を吐きて居れり今に此邊にて戦が始まるべし實に困つたるものなりなどと大に恐れ倉庫の米悉く賣拂ひ何時にても逃れいづべき用意したりとかかゝる例は實に田舎に於て幾らもあり枚舉に遑あらざるなり其他彼の經濟界に劇因を生ずる恐慌或は百姓一揆等彼等の誤想による勘しとなさず

要するに彼等は思想單純にして識見に乏きを以て一方疑惑恐怖の念

### 第六節 概念の構成

と共に誤想するなりよしや悉誤想ならずとも彼等の想像は多くは發働的ならずして受動的なるを以て想像としては其價值甚低度なるものなり又彼等の想像はよく恐怖苦痛等の感情を擴大し或は感官的快樂の心象を構成して感情に悪方向を與ふるに至る事常なり而して彼等は社會の事物に向つて經驗する事少くために他人の談話によりて諸多の事實を想像せざるべからざるを以て彼等の想像は比較的に活潑なる事恰兒童の如きものあり然れども如何せん彼等は想像の要因たる該博の知識確實の觀念に乏しきを以て其想像たる多くは誤謬なり

概念の構成には第一比較第二統合第三概括第四命名といふ四箇の識活動を要す兒童及未開の人間には思考熟慮といふが如き悟性及理性

の作用に乏しく主として覺性的感情によりて心意を支配せらるゝを以て彼等には無論論理的な概念といふものは少くして重に心理的概念に止まるものとす心理的概念はたゞ馬なら馬といふ言葉の下に直に心裏に浮ふものにして其概念は或は馬としての性質を欠き又不必要なる性質を包含することもあり又肥料と云へば人糞尿を意味し天氣といへば晴曇雨の三に出てすかゝる概念が漸次發達して多くの事物につきて比較辨別の作用を行ひ衆多同類の觀念中より共通點を抽出し之を概括して構成したる所謂論理的觀念を生ずるなり農事上のことは土地肥料植物昆虫氣候等諸種因象の交錯せるものありて嚴密に言へば諸種の職業中農業程難きものはあらざるへしかゝる複雑なる諸因を考究投手すべき農業者には觀察經驗を基礎として確實なる論理的觀念を構成し以て諸般の因象を説明すべし農民に概念構成の必要なる今更論するの要を認めず乍併彼等が智見の狹隘なる獨感情の

方面のみ活潑に作用して愈偏固に陥り舊慣に執着し惡習に固染して以て未其改良を謀り進歩を期せんとするものあらず悲いかな希くは彼等をして今少し智的方面の開達を謀り概念の構成理想の高度に勉めんことを

### 第七節 審美心の欠乏

美には要素として内容と形式とあり内容とは聽覺視覺等の對象たる音形狀色などの如きものをいひ形式とは均齊金截法調和律動といふが如きものをいふ而して美感の發達は大に理想に關するものにして同一の要素を具備せる美物も之を見聞せる人々の主觀的差異即理想の高下に從ひて美感の發現に著く差異を生ずるものなり然るに彼等農民には理性の働殆皆無なるを以て從て彼等の理想は甚低下なるを免れず故に彼等の美感も亦甚幼稚なるものにして彼等には到底均齊

調和律動等の形式的要因を識得する事能はざるなり彼等美感の養成は人工物によらずして自然物による自然は許多の美を發現せり動物植物等の有機的形態整齊なる結晶大空の燦然たる星辰等悉皆造化の美を現はさざるはなし然れども自然美は其表現廣大なる空間及時間に亘りて其整合稍茫漠散漫なるを以て得て容易に其眞想を味ふべからず何となれば彼等眼光の及ぶ所は局邊的にして包大的ならず然るに自然の美は之を局邊的に見る時は甚不規律にして均齊調和等の要因を欠き殆彼等の認識を超越するものあればなり故にたゞ彼等は自然美中の局邊物即山野自然の花蕾を眺め天地禽鳥の囀づるを聞き或は松吹く風のさわ音に谷もる河の水音位を美感發達の唯一の要因となすのみ蓋發達せざるべし見よや彼等が住居する家屋或は邸内の有様の如何に野卑に彼等の着用する衣服の如何に不立派なるかを彼等は徒に宏大なる材を擇びて之が建築に資し又實に資質佳良の衣料を

用ふしかも甚不調和にして美的ならず是誠に審美心の未發達せざる處にして彼等が都會人士の生活を見て空しく羨望し又徒に自卑下して以て都會人士に輕侮せらるゝもの眞に是審美心の幼稚なるに基せり實に審美的感情は高尚優美なる性情の源泉となるものなれば教育上最注意すべきものなり審美的感情は一定の陶冶を経て以て妥當なる審美的斷定をなす能力を獲得するに至るものなり教育の任に當れるもの夫れ宜しく美想的農民を造ることに勉むべし

### 第八節 愛情の欠乏

人は社交的の動物なり社交的の動物といふ事は人々相集りてある事をなしある話をしたしといふ感情を有し互に心情の融和を謀りて和氣藹々たる所謂うららかなる處あるを謂ふ而して此心は即愛情なり勿論單に愛情といふ時は生理的愛情とか感覺的愛情とかいらくあ



らふが我々が今此に言はんとするは同情より起る愛情欽仰より起る愛情の如きものにつきてのみ論ぜんとす  
愛の對象が國家社會の區別を離れて人類の全體となれば愛は博愛となるなり然れども總じて自己に多く近似せるものに對しては自他の區別を没却して我の觀念を構成し易きが故に吾人は自己と狀態を等うせるもの父母兄弟朋友等に對して愛情を起す事迅速にして且容易なれども社會國家若し人類に對する愛情は之を喚醒する事甚困難にして悟性的及理性的發達の一定の程度に到達せざれば之を生起する事能はず之を要するに同情は他人と苦樂を共にするより生ずる感情にして高等なる社會感情の基礎をなすものなり此感情は自然の動向共同の生活利害等に原因して發達し智識言語及審美的感情の進歩に伴ひて純粹に精神的のものとなるに至る而して同情的愛情といふものは其要素として觀察理想の働きが必要なり然るに彼等の如く

人々相交際する事の少きものには是等の要素に乏しきがためたゞ僅に父子兄弟の間にこそいくらかの同情といふものはあるかなれども一般他人に對しての愛情は餘程劣つてをるなり即彼等が社會に立つや實際孤立索莫自己の念に厚くして利他心に乏しく一郷一村の事業として計劃する事を講ずるに當りても各獨立の意見を以て何人も利己を先きにするが故に事の調纏甚難きを常とす時としては極簡單なる問題に向つて三日も五日も費し其間或は酒に或は餅に徒に舌唇を肥し而して尙決定せざるがため遂に解綻に終る事あり是もとより知見の足らざる處あるに相違なしと雖も然れども亦利己の念をささにして公共を欲せざればなり愛情の社會成立上必要なるは既に言ふを要せずたゞ爰に彼等をして今少く識見を廣大にして社會的愛情を發揮する事に勉むべきのみ  
熟々思ふに日本人に公德心が乏しといふが公德は社會公衆に對する

の徳なり無論他人に對する愛情より起るに相違なし然るに彼等農民の如く人事社會よりいへば極狭き區域の生活にしていかて公德なとが完全に發達し得べき西洋人が公德心に富みて居るといふは要するに彼等は廣き世界に生活するが故なり廣き世界とは土地も廣く社會も廣ければなり従ひて一般に普通念に富み廣き心をもち他人に對しても大に愛情を有するものあればなり伊庭の星謀殺の如き社會公衆のために彼を殺したりと謂へば隨分廣き心があるやうなるものゝ是を私人上よりいへばたしかに彼は偏狹なる昔堅氣の頭を有せるものと謂はざるべからず文明國の制裁は衆人間に行はれて決して一個人として制裁の犠牲に當ることなし彼の心中は憐むべきも彼の識量や推し測らるべし又實に社會の上より論ずる時は彼が彼の謂ふが如き社會の毒人を社會公衆によりて打撃を加へ得ずして遂に彼一人の俠客の手によりて伐たれたりと謂はゞ誰か是に向つて國家の名譽なり

といふものあらんや伊庭は都會の人間なり教育あり識見ある男子なりしかも理性の働を誤る事かくの如し交通不便なる田舎に住する農民の識量や推測するに難からず彼等が公德の念に乏しく協同心に欠けてある豈怪むに足らんや

### 第九節 意志の薄弱

意志作用には判断と決意との二要素を有するや明なり吾人はたゞ單に器械的若くは盲動的に行爲する事なく必ずや一定の目的を有し之に達せんがために種々の手段を考へ出すべしされば意志には必目的の觀念及手段の觀念の相共に存する事を要す而して此手段の諸觀念は即思慮判断の生ずる所なり思慮判断の後は決定にして決定は意志最後の現象なり之より一步を進むれば即行爲となりて現るされど決定は常に直に行爲に現るゝものにあらず事宜によりては或は直に或

は數年の後に至りて現はるゝものなり乍併決定は動機の影響にして思慮は時として動機を抑制する事あり故に動機は必ずしも決定をして進行せしめず一旦現はれたる決定も其勢を失ふ事あり農民は身體的勞苦には甚堪能なるものなれども精神作用に至りては驚く程に薄弱なるものあり彼等の行爲は彼等作業の機械的盲目的に流れ易きより影響せられて凡ての事が悉く機械的盲目的に陥り易きなり彼等は別に深く思慮する事なく判断する事なくたゞ専利慾といふ動機の儘に支配せられて適從處を定めず又もとより義務責任に顧みることなく自我は不統一にして殆精神病者の如し故に彼等は終始一貫の意志を以て作爲する事能はず彼等の意志といふものは深き思慮に明なる判断を有せざるを以て従て一旦決定せし事も或他の觀念の之に作用する時は直に其決定を破解して顧みず實に彼等の精神は動搖窮りなきを以て従て彼等の意志の藩弱なる事紙の如し彼等に忍耐の心なく

大器晚成的の人物に乏しきは蓋全く意志の薄弱なるにあり

## 第十節 理想の低度

吾人の慾望は限りなくしかも現實の事物には限あり而して其限ある事物も不完全なるもの多く到底吾人の慾望を満足せしむるものにあらず是に於てか吾人は自己の心性に備はれる理性の作用に由りて自己を満足せしむべき概念を構成するに至る是即理想と名くるものなりされば理想は之を構成する人の精神界發達の度に應じて精粗詳細種々の階級あるを免れずと雖各自の心中に於ては孰も完全無欠として之を認容するものならざるへからず理想の構成たる其順序方法等固より想像作用に異る所あるにあらず従て其材料も之を現實界に求め自己か満足せる眞を探ね若くは善美を集めて一の圓滿なる眞善美を構成するなり宗教家が尊信する神佛

の如きは其最多方面に渡れる抽象的概念及理想的總念の適例なりとす然れとも農民の神佛を祭るもの別に神佛を以て完全圓滿なる道德的理想物とは思はざるなり彼等の神佛を祭る其對象物は多くは偶像若くは自然物なり偶像としては惠比壽大黒釋迦不動日蓮弘法等あり自然物としては動物植物高山岩窟等あり動物の中にて崇拜を受くるは狼狐蛇なり植物にありては樟杉松櫻梅等限なしと雖多くは老木なり高山にては富士山御嶽立山白山大峯山大仙等なり岩窟は峻峭險怪斷崖絶壁の處を多しとす兎に角彼等には最高なる理想として神を祀り佛を祈るにあらすして一種恐怖的感情より起りたる敬虔的情操と共に專冥福を祈らんとするにあり彼等の不平憤懣は之を漏すに由なく復之を壓へて慷慨悲憤一片の熱血となりて發するにあらすして全悲觀的なり彼等はたゞ神佛のためには不平を晴し神佛のためには憤懣を慰せんと欲するにあり彼等は一心凝て神靈に徹せば身の病苦は

勿論未來の災害を逃れて幸福場裡に生活する事を得べきものと信するなり故に神佛は實際彼等の理想物にあらす彼等の理想として最高尙なるは勤儉貯蓄以て他日の繁榮を期するにあり其下等なるものに至りては直接的快樂を貪らんとするに過ぎす彼等は道德的に一種の理想物を形成し之に頼り之に近かん事を欲するかために純潔なる生活高尚なる處作をなすにあらすして彼等は多くは覺性的感情のため物質的快樂を得んとする至近最低なる盲目的願望に外ならず故に彼等の理想は嚴密なる理想にあらす何となれば理性によれる高尚のものにあらさればなり

### 第三章 農民の習慣

#### 第一節 田舎の概狀

田舎は萬事頗殺風景にして索莫孤寥の感あり夏より秋にかけては到

る處青稻綠波を噴はし秋より春の間は此水田殆全乾田となり多くは二毛作なれとも亦随分空しく明地となれる處も尠からず明地の中には水田渺茫沼の如くなせる處も多くありこゝかして田圃谿谷の間には茅にて葺けるあばらやの點々散綴して見ゆる處いと寥しげなり風の吹く事甚多きが故に家宅の周圍には風除けとして綠樹の鬱葱たるありて稍風致を保てりしかし別に此風を利用したる風車はなく水酌の如きも皆跳ね釣瓶といふ不思議なるものを用ふ水流に沿ひし地には水車ありその簡單なるものは車軸の双方に二つの大柄杓を結び付けたるものにして此柄杓に水一杯溜まれば車は即一回轉するなり跳ね釣瓶と此水車とは日本開關以來更に變せざる品なる可し馬は多く飼はず牛は少々飼へとも何れも多くは運送用に於て耕作に用ゆるは僅かの間なり肉用乳用のために飼ふものは甚稀なり耕作の器具は皆小にして人の手を以て動かすもののみなり果樹園も甚少く園藝業亦

盛ならず養蠶は稍盛なる地方もあれとも養禽養蜂は概して未不振なり要するに水理土功其他器械類の理化學應用の設備甚少なく農業も主に稻作に限りて其他の事に及ばず副業も亦甚盛ならず農産製造の如き亦甚不振なりといふべし

### 第二節 太陰曆を用ふ

曆法は毎季候の變化する月日不定なる太陰曆を用る却て季候の標準の毎年變化せざる大陽曆を疑へり曆法を改定せられたるは今より二十八年前の事なれとも實際之を用ふるは都會のみにして田舎は殆全大陰曆を用ふ故に新年式を始め總ての式日は都鄙別々にして殊に金錢上の取引の如きは毎年總勘定を歳末と中元との二度にするか故に都鄙重複して甚不便なり其他多くの年中行事都會と田舎と別々なるが故に都會の人が休業せんとする時は田舎より繁用を持ち込み都

會の人加繁忙ならんとする時は田舎の人は優々として知らぬ顔をなす金融も亦斯の如く都鄙別々に跋行するは妙なり

### 第三節 正月の儀式及遊び

農業の休閑期に際して春陽來復し天地改新の吉祥をもたらすの正月は貴となく賤となく皆一年中の業務をかたつけて更に新年の佳慶を迎へんと奮騰よりの諸種の準備は此に目出度も終らんとす門には門松と謂ひて雌雄赤黒松の松に梅竹を加へたるものを對立せしめ渡すに裏白さしたる注連繩を以てす簷前には日の丸の旗を立つ家内には床に苞美はしくせる二俵の粉米或は玄米を臺として其上に盤板を載せ正面に刈稻を掛け兩側に松をたて注連繩を張り多くの大幣を飾り其前に紫の幕を張る俵上の板面には籠或は吳座を布き其上に諸種の供物例へは大なる祝餅密柑橙栗等を備へ其前には横竿に昆布鰯掛鯛

吊柿大根蕪菁午莠古錢ほんだわら等をかく俵の前には例鎌等を供へ以て歳徳神を祭る恵比壽大黒の棚飾亦是に同じ是實に大晦日の日に行ふものにして年中の總勘定亦此日に済ますなり此夜はろくく眠りもせずしてたゞ只昔に明くるを俟つ

元旦には朝暾未登らざる中に主人先づ起きて注連ひきたる新しき桶に若水を酌み餅を雜煮して之を歳徳神福神及釜神鎌神鍬神臼神等に供へて祭るかくする内に家族悉く起き主人に従ひて祭り以て今年の豊作を祈るかくて神様の御相伴なりとて家族一同雜煮を食すれば夜はほのくくと明け渡る此朝の鳥の鳴聲は今年の米一俵の價なりとて注意して聞くの風習あり夜全く明け渡れば掃き始め拭き始めと稱して神前を拂ひ清め後家内の掃除をなし次に男は明き方に向ひて書き始めをなし女は縫ひ始めをなし歳神に奉るそれより男女新調の服装に改めて鎮神に参り又年賀に廻る年賀の人の家に入りて賀意を表

するや三寶といふものに祝餅橙栗柿或は昆布鰯などを載せたるを出す賀客まづ之を拜し次に祝酒を饗せらる祝酒の事なればたゞ其儀式に留るかと思へばなか／＼の大宴会なり馳走は正月常確りの餅の子煮豆酢午芳辛馬田樂などの外干麩椎茸里芋野山芋蒲鋒鱒鮎鱒焼豆腐鰯昆布密柑等の盛合吸物には蛸或は鰻或は赤貝に豆腐などに海苔鰹節を加へたるものを用ふ酒は初は屠蘇といふ藥交の冷酒を用ゐるとは普通の日本酒を温めて用ふ賀客はかくの如く戸々馳走を外すことなければ終には大酔となりて雪路に倒れ新調の服裝も泥塗れとなり新年早々呻吟の體にて家に歸り褥に就く事敢て珍しとなさず

二日も亦隣保郷村中残れる處を巡り行き昨日の苦みに懲りもせて猶諸所にて馳走を受け又もや大酔苦悶の體にて歸る事元旦に異ならず

三日は福貰ひとて早朝より稻荷昆沙門辨天等に詣つ此日扇神様に參るに扇子を持つの風あり或は袋を拾へば福の授りと稱して祝ふもの

ありと謂ふ此日も親戚知己の内に年賀に行き酒を飲み雜煮を食ふ事前日に異らず

四日は仕事始めと稱して藁細工をなして歳神に供へ山入りと稱して芽及うつきを切り歸りて奉る此日は僧侶の年賀に廻る日なり

五日も親戚知己間の年賀に行き酒を飲む事前日に異らず

六日の夜は恵比壽の年請ひとて同神を始め七福神を祭る春の七草を盤板の上に載せて供へ男の子には摺棒女の子には杓子を持たしめてこれを打たしむ其時の唱へ言

唐土の鳥が日本の土地に涉らぬ中に

七草揃へてやつほつほ

七日は五節句の一なり早朝に起き前夜の七草を以て雜炊飯を作りて之を神に供へ家内一同も相伴と唱へて喫す

八日は爆竹の竹迎へと稱して休み大なる苦竹二本を伐り來りて之に

五色の幣ひをつけ各組内の中央に立て赤黒松を雌雄しゆうの松と唱へて其竹のほとりに立て之に横竹よこたけを渡し竹の上には竹骨紙張りの大綱おほなみを作りて兩方にかざし中央には大なる日の丸扇星火の玉等を作りて之を掲げ或は正面に歳徳神としとくじんと書きたる額面がくめんを揚げ燈籠とうろうを掛け或は其周圍に赤白紫等の旗幟しほを立て大鑿太鼓おほぞうだいこをたゝき飾り祝いわいと稱して酒を飲むそれより毎日毎夜其鑿太鼓をたゝきて隣組となりぐみとせめきあひをなすせめきあひに勝ては年がよしといふより双方共に燒氣やまきとなり酒を飲み肴を食ひ徹夜とちやしてやる事珍しからす終には口喧嘩くちげんかを始め進みては下駄げだを以てなぐり焚木たきぎを以て打ち合ふなどの騒さわぎとなり是がためには警官けいこうを煩わづらし醫藥料いやくりょうを投なじ無用の時間を擲なげち多くの酒食を費す等其損失えんじつ實に尠すく少なからす斯くの如くする事十五日まで凡一週間なり

九日は山の神の祭日として休む此日山神樹木やまのかみじゆもくを數ふが故に山に入るときは共に數かずへ込まれて崇たかりを受くといひ一人として山に入るものなし

十日は金刀比羅神ことびらじんの祭日として近郷きんきやうの金刀比羅神社に參拜するもの尠すくからず

十一日は田打正月たうちげつと稱し早朝に起き出て、田神を祭る白餅しろもちに白酒を供へ餅もちを以て田を三打ちするなり此時の唱へ言

一餅もちに千石二餅もちに万石三餅もちに數知らず

夜明くれば小作人は地主の宅に舊年きうねんの禮に赴き尙今年もと請ふ地主は馳走ちそうして小作人を勞らうふ

十四日は左儀張さぎちやうとして朝より家族一同が當夜たうやに寄り合ひ藝妓酌婦げいぎしやくふを招きて大宴たいえんを張る宴酬えんたうにして酔廻よまわれは歳徳神としとくじんの御神輿ごしんこを控かかき出して鑿太鼓ぞうだいこをたゝき笛ふえを吹き打ち合せをならし獅子面鼻ししめんばな高面たかめんを被り幣幟へいのぼしを立て或は顔をつくり姿をやつし異様奇彩いさうきさいの風態ふうたいを以て之に供し處に據りては酌婦藝妓しやくふげいぎを是に伴はしめ三味線鼓さんみせんつづみを諸種の鳴り物に奏和そうわ



せしむるなど殆狂氣の有様を演ずる事あり醜婦を伴ふは彼等の嫵姿  
 艶装をせき合ひて世人に誇張するがためなりと謂ふ彼等は神は神聖  
 なりとして手を清め口を雪きて祭る併も醜婦淫人を神輿の列に加へ  
 て以て其體を得たりとなす歳神果して喜び給ふや否やそはともかく  
 も彼等は實に醜業婦ほど婦人としてきれいなるものはなく立派なる  
 ものはなしと思ひ以て此矛盾の行爲をなすなり又實に笑ふべきの至  
 ならずやかくて組中をありき廻りて歸り其夜は徹夜して飲み且食ひ  
 て騒くなり

十五日早朝に起き出て、さきに飾りし竹松其他一切の飾物を寄せあ  
 づめて火を放つ之を爆竹といふ其時書き始めの紙を火中に投ず焼紙  
 高く上れば手が上りて能く書く様になるといふ歳神に供へし祝餅を  
 焼く割れ目を生す其割れ目大なれば歳がよろしといふ足の裏を炙ぶ  
 る裏虫が食はぬと謂ふ爆竹の竹を以て灸箸を造れば灸が能く利くと

いひ菜箸を造れば煮物の味がよくなるといふ  
 十六日はときと稱へ佛正月ともいひて豆腐油揚百合蓮根等を煮て佛  
 霊を祭る寺墓が賑ふ日なり  
 十八日は大峯山の祭日とて先達等相集りて講を開く  
 二十日は二十日正月と唱へ餅團子を造りて食ふ此日綱打ちとて牛馬  
 の牽き綱釣瓶の綱負籠の綱等農家使用の綱を近隣四五軒つゝ寄り合  
 にて打つなり打ちたるあとは酒宴を開く  
 二十四日は秋葉祭といひて火の神を祭る  
 二十五日は天満宮の祭日とて學校に出る子供などの天神爆竹といふ  
 を行ひて祝ふ日なり爆竹の有様殆大爆竹にちなじ  
 二十八日は牛馬の神たる荒神を祭り家畜の無病健全を祈る  
 二月一日満正月と稱へ楽しき正月も愈昨日までにて終れりとして此日  
 も餅を搗き酒を飲んで祝ふ

正月の遊びには男子は將基双六骨牌トランプなどあり女子の遊びは毬をつき羽子をつく等都會に異らず處に據りては寶引とて穴あきたる錢を繩に挿し錢つかぬ多くの繩と共にして是を人に取らしめて錢つきたる繩の來れるを喜ぶの遊あり是は賭博に類する惡しき遊なるを以て漸次衰運に向ひて今なすものは一人もなきに至れり正月は實に彼等農民の休閑期として仕事するの日は甚少く体を休めて旨いものを飲み食ひする時なれば彼等に取りて實に一年中の最幸期なり

#### 第四節 初午及涅槃

二月に入りて初めの午の日を初午といひ諸所の稻荷といふ祠の祭日なり稻荷の祭神は狐なりと謂ひ石造陶造の大小狐祠の周圍に供へあり祠の後方には直經五六寸の圓孔を作る是は狐の出入する孔なりと謂ふ孔の周圍には小豆飯豆腐油揚温飩素麵等の堆高く供へられたる

は狐の好食するがためなりと聞く序に申す山陰地方には狐持ちといふ事あり人狐と稱するものを飼養するか或は稻荷様の狐を頼みて種々の意志を達するなり狐持ちの家人の怨恨をば其狐が晴らして仇を打つといふ仇を打たれたるものは障られたりと唱へ初は病苦に惱み後には種々下らぬ事をしやべり散らし或は苦み或は喜び或は悲み或は笑ふ歌ふかと思へば又語り語るかと思へば怒るなど丸て狂人の有様なりかくなりたる時は障られたる家にては先達を招き法印を請じて祈禱をなす余は一度其病人に出會し親しく法印の平癒せしめたる有様を目撃したり初床に種々なる掛物をかけ供物をし香を薫して諸神を祈る次に疊の上に藁四把を列べ其上に藁を布き吳座を掩ひ其上に病人を座せしめ一本の白幣を持たしむかくて病人に向つて祈願を始むれば病人は痛く苦しがり持ちたる幣を上に乗げ上げ身を起して立たんとす而して悲聲を擧げて哀を請ふ是に於て法印は祈願を止め

大喝一聲静まれと叫び次に汝何の遺恨あつてか此に来ると問ふ何の  
 怨みもなければどもたゞ遊びに来れりと答ふ何の怨みもなくして來り  
 しかも萬物の靈長たる人間を苦しましむる事如斯汝の罪甚大なり容  
 易に許すへからず余は今汝の怨なくしてこの大罪を犯ししにより不  
 動の金縛りを以て汝を絞殺せんとすと叱するや彼悲叫を放ちて呻吟  
 し許して下され最早歸ります今に歸りますといひて哀を請ふ然らば  
 今歸りたる後は如何なる事のありとも千載此家の邸内に足踏みする  
 事ならぬぞ歸りても亦來る様の事あらばその時ころは汝等父子を葬  
 る事旦夕を待たぬぞと大喝し病人室の外方障子五六寸許を明くれば  
 病人は立ちて二足許ありきたりと思ふや否や明きたる障子の間に向  
 て奇聲を擧げて仆る暫くして之を起し醫藥水を給して仰臥せしむ人  
 は皆邪狐去たりと思へり何ぞ圖らん又もや胸が苦しと言ひ出すかと  
 思へばクラ／＼と笑ひ出したたり是は怪からぬまだ去らぬかといひさ

ま法印は又前の處に座せしめ祈願を始む稍ありて法印は已が授りた  
 る内務省の免狀及法印取締役の授令書などを澤山にならべ嚴然端座  
 して曰く抑あれを何とか心得たる我事は内務省の免狀を得たる手間  
 (地名)の戒乘院何某といふものなるぞうか／＼しをると汝のみならず  
 汝の家族悉くを絞殺するぞと力味語るや彼又戦きふるひて哀れなる  
 泣き聲を放ち今度こそは愈歸りますア、早く歸りますすつらくてなり  
 ませぬ恐しくて堪りません今に歸りますれば如何なる事のありとも  
 再び入來しませぬとていとも苦げなる風にて哀を請ふ是に於て再び  
 障子を少く明けて逃げ路を作る事始の如しかくて病人は始めの如く  
 にして仆る水及藥を給する事亦始めの如しかくて一時間ばかりはす  
 や／＼と安眠せるものゝ如かりしが後醒めて胸の苦み減りたりとい  
 ひ時経ても起らざりき法印即病人の布きたりし藁蓆などを高山の頂  
 に於て人に遣はさる様にして焼拂はしむ是に於て障りは愈除きたり

といふ病人は其後全快せしかとも少しは精神の働きが鈍くなりたる様に感せり畢竟是等は精神的病人にして狐如何に靈妙不思議の作用をなすものなりとも未人間の体内に入りて苦惱を與へ且精神上にまて其作用を及す事あるへからざる理なり病人をして種々の事をしやべらすは今の殆催眠術なるへし而して之を治する方法に至りても亦全く精神的なりと思惟せらる然るに狐持ちと謂へば何人も之を惡み嫌ひて縁組を忌み親交を避く之がためには數万の財産を有する家にも娘のもらひ人なくために年頃過ぎて世の果敢なきを嘆するもの少からずかゝる家に生れたる子女こそ誠に氣の毒の至なれ豈又馬鹿しからずや

淫禁は二月十五日なり是日は釋迦入滅の日にして村々の寺には釋迦入滅せられて萬の生物が之を悼み悲む處を描きたる掛圖を掲げ種々の供物をなして之を祭る是日は農家業を休みて寺に參り餅を搗き或

は霰餅大豆などを煎りて佛前に供へ以て釋尊を祭る

### 第五節 雛祭と札所巡り

三月三日は五節句の一にして家々には雛祭りといふ事あり小き人形を棚臺の上に飾り付け桃椿などの花を瓶にさして飾り赤飯貝類土筆煎り豆等を供へて祭る人形には親王内親王の冠帶嚴かに着なされたるや天神の衣裳着及土偶あり或は古今の英雄剛傑が弓矢持ち刀をさしたる或は裸人形衣裳着人形虎狼熊牛馬犬の模形等あり金時の熊に乗りたる辨慶の七つ道具もちたる熊谷直實が平敦盛をさしまねく處などよく見る處なり小供のある家などは殊に綺麗に飾り附くるは畢竟小兒をして或は優艶に或は雄狀に剛邁に又或は愛情を増發せしめ或は審美心を發達せしめ女子などには殊に行儀作法を見習はしめんがためならんか兎に角習慣としては兒童教育上甚よかるへしと思は

る  
札所巡りといふ事ありて三四月頃時侯のよき時に観音或は地藏尊を  
巡拜するなり出雲國の如きは観音三十三番まであり之を一巡するに  
凡八九日を要す男女共に巡禮するなり新佛の生じたる場合などは多  
くは必ず巡禮することとす旅装は男も女も大抵は笠を被り婦人は白  
脚絆に白足袋を穿ち男も脚絆足袋に草鞋を穿き各竹杖をつきて行く  
なり所々にて接待といふ事あり餅菓子茶或は草鞋等を巡禮者に與へ  
て慰はしめ一厘二厘の賽錢を貰ひ受けて之を其地方の観音或は地藏  
尊に供養するなり是等の事が宗教上如何なる靈驗ありや知らされど  
も兎に角春風駘蕩百花爛熳として芳を競ひ禽鳥嘯づり胡蝶戯るるの  
候に當りて輕装連歩杖を曳いて効外を散策す何等の愉快ぞや親血介  
れて涙未乾かす鬱悒日を送るもの亦以て聊憂情を遣るに足るかくて  
歸れば心氣又少しは更りて壯快を覺え仕事は前に倍して幸運巡るべ

し蓋以て佛靈の御蔭なりとなす所以なり

### 第六節 四月八日の山登及大仙祭

四月八日は釋迦の誕辰なりと稱して赤飯餅を作りて佛壇に供ふ寺に  
參れば小き釋迦像が直立して天上天下唯我獨尊とて右手を以て上を  
指したるを見るなるべし其側には花臺に桃櫻罌罌紫雲英蘇金芳花等  
の花が山なりに飾りつけてあり又參拜人が甘茶を以て釋迦像の頭に  
かけ次に之を戴きて飲むを見る  
農家は此頃より繁忙期に向へるを以て春期最終の遊びに登山を企つ  
るもの多し是には大抵家族を同伴し隣保知己にて共同の炊き出しを  
なし之を携ふるを常とす巔上或は海波風帆の走るを眺め或は平野紫  
雲英雲臺の花を眺めて樂むなり興極まりて日の將に西山に昏かんと  
するに臨みて歸る

新曆五月二十四日は大仙祭りだいせんまつりと稱して休む大仙にては牛馬の市あり故に大仙の權現ごんげんを牛馬の神と稱す是時節より牛馬を使役しやくやくすべきが故に其安全ならん事を祈るなりるべし

### 第七節 五月幟及半げ生

五日五日は五節句ごせきぐの一なり屋根やねに葛蒲しよぶを葺き家々には幟のぼりと紙張りの鯉こひを竿の先きに立て、庭中に飾り柏餅かしはもち或けちまきを作りて食ふ昔弘安四年五月蒙古國號もんここくごうを元と改め南亞なんあを蹂躪じゆうりんし勢に乗じて我國に攻め來り十万人の軍勢に數百の艦艦を送りたり時の執權しつけん北條時宗はつじよとせむね胆略たんりやくにして武勇あり全國に令して手足の立つ男子は悉く出軍すべき旨めい嚴達げんたつせり依て男子は悉く征軍せいぐんに従ひ一人として家に留るものなかりきそれがために今に五日の前夜は宵節句よせきぐといひて女が祝ふなりかゝる危急きふの大難たいなんも天祖てんそ天神てんじんの冥福めいふくによりて我軍大勝を得彼生きて還るもの

僅に三人なりきとか菖蒲しよぶを屋根やねに葺くは日本は屋根までが刀菖蒲やぶの葉刀はに似たりにて葺きてありとて威いを示したるなり幟のぼりを立つるは男おとこ兒生長の後一旦緩急くわんきふあらば幟のぼりを立て、軍に従ひ以て天壤無窮てんじやうむきゆうの皇運すううんを扶翼ふよくすべしとの所謂大和魂やまとたましひを示したるなり幟のぼりには神功皇后じんこうこうごう武内宿禰むちのすくね源頼光げんよりみつ頼朝よりとも牛若丸うしわかまる辨慶べんけい加藤清正かとうせいせい豊臣秀吉とよひでよしつね平敦盛ひらあつむね熊谷直實くまがひなただみ等昔の英雄いゆう剛傑ごうけつを畫き小兒せうにをして益雄壯やくゆうさうの念を起さしめんとするものなり此日子このひ供若者は水鐵砲みづてつぱうを作りて誰彼の別わかなく殊に婦人に主に水を撒きかくる習慣しゆくわんあり又菖蒲しよぶを束ね網あみにて巻きたるものを持ち臂うで打ちと稱して若き婦女子の臀部でんぶを打つところもあり此日女は菖蒲しよぶにて髪かみを結ぶ髪かみに澤を生ずればなりとなり  
半夏生はんげしやう新七月三日は梅雨はつりゆうのをさめにしして俗に泥落どろおちしと稱へ田植其他のこなしを終へたるため泥を落して骨を休むといふ考なり戸毎に餅もち團子だんごを拵こしらへへ酒を飲みて休むなり

### 第八節 れんげ生

れんげ生(舊六月十五日處によりては新七月十五日にするもあり)農家は田植後は毎朝草を刈りて牛馬の飼料を作るが例なるが此日に限り朝草を刈るべからずと云し又田の水口を揺らふ事もならぬといへり是日は早朝より夕方まで塵一本ひねる事もならぬ位に休みて農事に使ひし牛馬を勞り泥を落さんとて皆々海濱につれ行き潮をかき汚れたる個所を洗ひ海藻を取りて清めをするをいふ或は河に連れ行きて洗ふもあり草を刈り田の水口を揺ふ時は山神田神の祟りを受くといふ蓋草は牛馬の粗飼料なり草を刈れば之を與ふ故に刈らずして他に豆類麥類等の馳走を與へて勞ふべしとならん又當時田の草取りの時期に際會すれども全戸早朝より休みて田の水口を揺らふなかれ而して牛馬を勞はれといふの意ならんか

### 第九節 七夕及盂蘭盆

七月七日は五節句の一にして星の祭日なり傳へ言ふ天に男女の二星あり男星を牽牛星といひ女星を織女星といふ男星は銀河の向の河岸にて牧牛をなし女星は此方の河岸にて機を織る毎年此日に男星河を渡りて女星を訪ふといふ小説的の妄誕なり戸々皆枝の附きし竹に歌かきたる紙の短冊を着け之を庭中に飾り瓜蒴子玉蜀黍大豆粟黍十六缸西瓜南瓜等を供へ餅赤飯或は麵類を作りて祝ひ祭る

盂蘭盆會一月十六日に七月十五日是に釋尊の誕生涅槃の兩日を加へて佛教の四大祭日と謂ふ然るに誕生涅槃よりは一七兩月の祭日重くして此日は農商工の別なく總て雇人を使ふものは其奴婢に休息を與へ且其生家に歸るを許し主人を始め家の老幼男女寺に参りて祖先の墓に詣り就中七月十四十五十六の三日は墓地に燈籠を建て家に柵

を造り先祖累代の佛名を書連ねたる位牌を安置し蓮花溝萩桔梗おみなへし等の花及種々の野菜穀草類を供へ僧を聘して祈禱をなし以て亡者の冥福を祈る是を盂蘭盆と呼ぶなり總て佛法の教にて死したる者の冥福は現世に於ける子孫の祈禱善根によりて享有せらるゝものとなし且盂蘭盆の時には死者冥府より舊居に歸ると説くが故に佛教の崇拜は此時を以て最となす實に盂蘭盆は佛教にて重大なる祭日にして之を祭ると祭らざるとは直接に祖先の冥福に關するを以て如何なる貧窮者にても相應の祭をなし心づくしの點に於ては富者もかはらざるなり又盆には祖先を祭るの外に一種の奇習あり盆踊りと稱するものは是なり多くは中流以下の人民が老幼男女相集りて大道或は寺院の境内にて圓陣を作りて踊り廻るなり是には太鼓を敲き歌を謡ひ踊るものは皆一種の不思議なる噺しをなして跳ね廻るなり踊るものも服装は誠に可笑しきものあり殊に若き男女の笠を被り脚絆を穿き

足袋を穿ち男子が女装し女子が男装し振袖を着出すあり夜具を着廻るあり或は巡査が囚徒をひき行くが如きもあり或は大腹をしてよろめくもあり或は書生の眞似商人のなり車夫の風をするあり其風采の滑稽醜態言語に絶す是間男女の醜行常に絶えずして風俗の壞亂亦實に言ふべからざるものあり思ふに農民風俗の改良中此種のものをして先要中の先となすべし盆の馳走は麵類牡丹餅團子赤飯油揚餅豆腐等にして衛生上消化の悪しきもの多く且踊りなどのために長夜してために胃腸を害し疫病を招くもの甚からず

### 第十節 八朔及月見の宴

八朔とは八月一日をいふ此日はまづ田の草取を終へまづ／＼當分實るまでは用なく田の事を終へたるを祝ふなり主人早朝に起き出で、田を見にゆき稻を眺めてよく出来たりと謂ひて寝むるなり酒を持ち



行きて水口に注ぐもあり此日までは冬大根の小菜を食はず此日に始めて神に供へ而して後食ふの習ひあり

月見には陰曆にて七月二十六日と八月十五日との兩度あり七月二十六日は夜明け前に出づる三體の月を拜まんとして高き山に上りて種々なる馳走に飲み且食ひつゝ夜明けまで待ちぬるなり此夜諸所にて烟花を打ち揚ぐるを以てまづ之を見て樂む中に月は東山の上に三體となりて現れ山際を離るゝや遂に一體となるといふ

八月十五日は仲秋の満月にして俗に芋明月といふ天高く氣靜に満月に中天にかゝるを眺めてそゝる萬感を談話に移す事詩人の詩歌に移すが如し芋明月とは今年作りし里芋馬鈴薯甘藷などをこの日始めて掘り出して神に供へかくて皆風味をなすが故なりといふ又妙なる習慣あり此夜に限り芋盗人に遭ふともあしく思はず却て喜び祝ふを常とすといへり

### 第十一節 重陽及亥の子

重陽は九月九日にして五節句の一なり菊を御酒徳利に挿して菊酒を作り之を神に供へて祭る此日女子は菊の花を頭にかざすの習あり

亥の子とは十月の亥の日をいひ年によりて二回のとすと三回のとすとあり共に餅を搗きて祝ふ子供若者は亥の子餅搗きと稱して藁の中に石を入れ繩にて括り之を以て地面を敲き大なる音のするを喜ぶかくて土橋などの上に行きて搗き其橋を落し損ずるを以て壯快となす里人亦之を怪まず故に時としては態と木片などにて橋梁を破壊する事あり悪き習慣と謂ふべし亥の子餅搗き歌に曰く

亥の子さんの晩に餅搗いて祝へ祝はぬものは

犬生め子生め角の生いた子生め

炬燵こたつと稱する方二尺許の爐ろを座に切り造りて火を入れ其上に四本柱の格子こしを載せ掩おほふに蒲團ふとんを以てす人其周圍に手足を納めて暖を取るなり亥の子の日に至りて始めて取り出すを常とす

### 第十二節 烏からすさで冬至とうじ及他の祝祭日

十月二十六日を烏さてといふ昔は人間が一人つゝ神のためになされたりしを今は烏が人の代りに一羽づゝさてらるゝこととなれりといふこの夜は赤飯せきはんを炊たき椽外せんがいに三杓みしゃく子こばかり焼物やきものに盛りていだし置き家内は悉く静肅せいじゆくを保つべしとなす然らざれば神にさて殺さるゝといふ故に早くより戸を閉めて家族一同小聲こゑにて談話し戰兢せんきやうの風あり  
冬至は新十二月二十二日にして一年中日の最も短き日なり此日は豆腐とうふを食すべしとて必ず食ふの風あり

其他庚辛こうしんの日には猿田彦命さるたひこのみことを祭り赤飯を作りて奉る庚辛の夜は長起きして談話だんわするがよしといふ甲子には子松こまつと稱へ小松こまつを抜き來り福神ふくしんに供へて祭る黒大豆飯くろまめあじを作りて供ふの習ひあり其他種時たねとき祝いわい苗代なへしろ祝いわい植付うゑつけ祝いわい代滿しろみともいふ稻刈いねかり祝いわい扱あき祝いわいコナシ祝いわい等と稱して歳神としがみ及七福神しちふくしんを祭り以て馳走ちそうをなすの風あり

## 第四章 農民のうみんの風俗ふうぞく

### 第一節 服装ふくそう婦人にんと赤物あかもの

婦人の方 田舎婦人の頭髮かみは其容易たやすく亂れざる様にせんために髪付かみつけ油あぶらといふ固き油を撫なで附けて結むすぶを以て塵埃じんあい附着ふし易く髪は常に黒くろ褐色かっしやくの汚よごみいろを呈ますそれに汗あせ或蒸發じやうはつ氣きが結合けつごうして一種の惡臭あくしゆうとなりて放散はうさんせらる大抵は手拭てふしを被り帽ぼうを頂くもの絶えてなし宮參みやまゐり或は客人きやくじんとなりたる時は頭に多くの簪かんざし并なをさすの風あり又顔かほに白粉おしろいを

こて塗りにするが故に恰春の燒山に霜の降れるが如し紅も亦多く口唇につくるを以てをかしたる口元となり物謂ひかぬるやうなり絹布を纏ふ事あれども品昂らずして俗めきたり穿物は普通は草履にして外に行く時のみ下駄足駄を穿くなり歩む時の姿勢は足を横に身体を前に屈め蹠蹠として家鴨の巢に入るが如し又田舎者に限りて赤き物を着くる事を好み頭の飾りといひ下着の襟といひ帯のはぎといひ襦はねといひ赤きものをつくるが如し赤を好むは心の發達上低度の時代なる事は多くの學者の認むる所なり從來の學者の試験によりて見るに兒童の好む色は諸種の色の中其最甚しきは赤青黄なり又女兒は男兒よりも赤と黄とを撰び男は女よりも青を撰ぶやうなり而して是等試験の結果は人種發達の嗜好と相符合するを見る野蠻人の赤黄等の色を以て裝飾とするは即是なり田舎の子女が好みて鮮紅或は鮮黄色の布片を装ふは盖心神發達の低度なる事を證するに足らんのみ

又田舎婦人は袖無しといふ袖なくして背部だけに掩はるべき綿入れを着するを常とす其形宛猿が蒲團を負脊ひたるに似たり又前垂れといふものを前に垂る後に後垂れをするものもあり其服装の妙なる事笑ふに堪へたり殊に衣服を高くからげて赤裸を現はし或は風に吹かれて翻々たる赤幕の下黒脛をいだし恬として耻づるなきものもとより從來の習慣として更らに怪まざるべきも誠に不体裁の至りと謂ふべし

男子の方 頭には仕事する時は手拭を類冠り或は麥稗製の大帽をかぶる習ひあり他に行く時は大抵は何も被らず偶に一定の形なき頭巾様のもの或は手拭を冠るものあり仕事の際は大概筒袖の襦袢様のものを上に股引を下に着るを常とす穿物は女子と異なる處なし歩む時の姿勢は女子の如く足を横に曲げされども前に屈むもの多し防寒用或は雨具用としては菅編の胴廻簀或は可笑なる着吳座或は赤毛布引き

廻しを纏ふを常とす近年は大抵旅行に赤毛布を着る都會の人が田舎人を見て赤が出たりといふは蓋赤毛布より起れるならん其服装の不体裁にして野卑なる事謂ふに堪へず

### 第二節 婦人の立姿男子の風采

婦人の歩み方に就きて見るに下駄は全く足に適當する様に造られ居れども一人として是を適當に履くものあらず皆横にもじりて踵を下駄の外に外し兩脚の脛を外より曲げ込み踵を外に爪先を内にして足を運ぶが故に其形は蛙の後足と同様となり従て身体の格好も亦蛙の如くならざるを得ず即臀部の處より屈曲して屈み腰となるゆゑ帯を以て其醜を覆ひ之を後に結びて裝飾となす然れども其帯は宛兵士の背囊の如きものにして誠に滑稽なり又た單に身体の屈曲せるのみならず通行の婦人は其の頭を下に向けて鬱憂せる様眞に神經病者の如し

又男子の歩み方の不行儀なるは殆言語同断にして或は態と裾をまくり毛脛を現はして場々たるものあれば腕を捲り出して更に恥ぢざるもあり常に着物を邪魔物にして厄介視する事宛無理に着物を着せられたる犬猿の輩に同じ又彼等の過半は常に衣服を適當に用ゐらず肉體と衣服とは別々になりて離れゝゝに動かす者多し其一例は田舎民の最喜ぶところの懐手にして兩袖は其形を備へながら此口より手の出て居る人は甚少く唯用事のある時ちよと手を出して用を辨ずれば其手は直に引込みて姿を隠くすなり又袖口は宛郵便局の受附口と同様のものなるが故に其手を常に着物の中の何れの部分に仕舞置か外より出でずして襟口より出る事あり其風采の横着なる實に見るに忍びざるなり歩み方は婦人の如く内輪尼的ならざれども大体に於て前

に屈み頭を低うせるもの九て犬の物をあさるに均し

### 第三節 婦人の風采

田舎人士の野卑なるは獨り男女風采の上のみならずれども殊に女子は男子よりも一層に鄙びたる處ありて都人士に輕蔑せらるゝ事甚しきものあり婦人の妻となれば眉毛を剃り齒を染む此は古より都鄙何れにもある風習なれども今日にては都會は殆全くすたれたれども田舎にありては猶依然として舊慣を改めず天賦の眉目清秀なる佳人も夫を持てば直に一種の怪物となる見よや眉毛のなき婦人が黒き齒を剃き出してけら々と笑ふ様は如何に男子の愛を買ふに足るべきか次に驚くべきは立小便なり其状態の醜穢なる殆見るに忍びざるなり然るに田舎にては中流以上の淑女と雖更に之をなすに耻ぢぬものあり立派なる衣服つけたる婦人が四辻にて衣服をまくり臀部を現は

し腰を屈め頭を回して往來を見ながらにじやらくと出す様實に言語に絶えたる下等の風習ならずや田舎の婦人は斯く風采と舉動とに於て頗下等なるのみならず一般に教育の度も低く社交の經驗も少きが故に品格非常に下りて見ゆ故に男子跋扈婦人盲従の舊習は極端に行はれ居り夫婦の懸隔甚し又下等農民に至りては或は薪炭を背負ひて市に鬻ぎ或は男のあとに車を押し出て随分男子も及ばぬ働振りをなすものあり如此下等婦人は立小便をなし車を曳くほどの勇者を出すにも似ず中流以上の婦人は却て案外にも怯懦にして憂鬱なり偏屈なり之を一言にて評せば氣鬱病人の如し如此田舎の婦人は上下共に六なものはなく田舎ながらにちよつとわかぬけて見ゆるやうなもの何となしに品格下りて厭や味を帯ぶ田舎農民の教育上特に女子教育の方面に向つての研究を要する事甚急なり

### 第四節 食物、麥に大根

日本人は歐米人に比して一般に粗食する事は今更申し述ぶるまでもなきことなるが田舎農民の如きは粗食中の粗食に甘じて敢て外を顧はず否敢て外を顧はざるにあらざるべきも田舎農民現時の生活は蓋止むを得ざる者もあらん思ふに衣服と住家とは近年比較的比較的に稍改良改良進歩せられたる様なれども其食物に至りては依然として更らず農民が春より秋にかけて汗膏あせりごたらして作り出せる米の大部は上納に費され僅に餘れるものは賣りて小使錢こつかひせんの料となす故に彼等は大抵麥を炊きて之を主食し副食物として大根を年三回も播き付け置き煮或は漬けて食ふ是の外には蕪菁かぶ、牛蒡ごぼう、胡蘿蔔ごぼう、里芋さといも、甘藷かんじゆ、馬鈴薯いも、佛掌薯いも、當歸かぢ、南瓜かぼちゃ、茄子なす、胡瓜かき、甜瓜あまぐり、薑山葵しょうさんき、芹せり、菘菜すなわば、山東菜さんとうさい等の葉菜類根菜類及大小豆、虹、蠅豆、蠶豆等の豆類及以上の加工品等にして丸て植物性のも

の、みなり會魚肉の膳に上る事あれば一家揃うて御馳走なりと叫び舌打ち鳴らして食ふ牛豚鶏の如きは一年僅に二三回も味ふ事ありやなしやなり殊に牛肉は牛飼ひたる家にては食はぬを習とす要するに主なる食物は麥飯に大根諸類なり料理法亦甚拙劣にして大根の如き之を煮るに中肉猶白色を帯び醬水未乾かざるに早や既に煮えたりとなし之を大皿に盛りて食ひ或は茄子、鰻果の白腹等を五升鍋に移し込み之に水一杯を張り麥にて作れる味噌みそと鹽或は醬油をさし之を大椀に移して三杯四杯と食ふ様に牛馬の駄食器たじきに向へるが如し漬物は、大根を葉込めに漬け置きて之を多分に切りさざみ醬油なくして食ひ或は菜に肥料干鰯かほを入れて煮たるものをさふくと食ひ或は豆腐粕くわに葱などを交ぜて煮たるものを食ふ様に羊豚の殘滓器ざんさいに當るが如し酒は彼等の最も好めるところにして彼等が田圃より歸り足を洗ひて上るや否や膳棚見かけて走り行き徳利を引き出し椽先えんさきに出て胡

瓜の揉みたる蕪の漬けたる或は梅漬け位にて傾け盡すを無上の快樂となすものゝ如し彼等には麥酒とか葡萄酒とかいふが如きものは殆ど無なり煙草は大なる草製の養入れに刻み煙草を入れ之を腰にさげ何時にてもばか／＼と吸ふを常とす巻煙草に至りては彼等の容易に吸ふこと能ざる所なり如此彼等の食ふところのもの飲むところのものまづくしてこれを都會人士の飲食物に比すれば頭尾の差あり彼等の活動性に乏しきや蓋又彼等の粗食なるにも由るならん

### 第五節 住家の状態

日本の家屋は大體の構造南洋風にして木材を主とし石鐵煉瓦は皆少し田舎の人民は四十年前に國を開かれ爾來明治の今日となるまで木材の外に家の骨となるものある事を知らざるもの多かりき是國を通じて大厦高樓の少き理由なるべしと雖も一には都會に於て未適當の

家屋の模型を得さりしにも由るならん民家は椅子と寢臺とを用ゐざる代に如何なる貧家も床のなき家はなし即床は其儘寢臺ともなり作業場ともなり又其上にて衣食もし談話もし遊戯もす故に時間外にも臥し轉び日中枕を出して寝るも勝手なり主人を始め家内のものは足を踏み伸ばし種々自墮落の風をなすも自由なり故に冬は寒國の民は炬燵に入りて晝寢をなし暖國の民は夏時に於て一家擧て晝寢をなすの風あり大町桂月氏嘗て島根の簸川中學に教鞭を取るや今市町民及其近郷村民擧て毎日午後一時頃より三時頃まで晝寢をなすに驚き町民の一人に泥棒が這入りはせぬかと問ひしに答へて泥棒も亦晝寢をなすなりといひきとて縣の教育總集會に於て日本人と題する演說中にて洪笑せしめし事ありき又炬燵を二階に設くるを何とも思はず表座敷の天井に四角なる箱様のものゝ下りて居るは正しく是炬燵なり炬燵は人の足を伸べ股を擴げ手を出して暖を取る一種の爐なり如此

者の表座敷の中央にぶら下り居る事あまりよき体裁にもあらざるべし田舎農民の禮儀的ならざる審美的ならざる驚くの外なし田舎の家屋は概して木造にして耐久力なく加ふるに屢火災の患にかゝり易く且極めて矮陋なるが上に天井も家根も低くして一種奇異なる茅小屋の如き觀あり加ふるに屋根は藁或は茅にて葺くが故に一層鄙びて見ゆ烟突の如きものも屋根の兩側面に小さなる窓を設くるのみなるを以て家内一面燠烟のために煤色を呈す暖室法を設けざるを以て冬季間作業する事能はず爬虫動物の如くにして炬燵にむぐり込むの外何もなし得ざるなり兎に角田舎農民の家屋は文明的建築と謂ふ事を得ざるや明なり加之ならず同じ邸内の家屋母屋納屋倉庫雪隠等の建築甚不調和にして門側に雪隠を置くかと思へば厩を表座敷の前に置き而して植樹以て之を掩ふ事を知らず物乾竿は松と躑躅とに横はされ藁すし又庭傍に積み設けらる何等の不整頓不調和なるや

### 第六節 臺所の景況

日本人の家屋殊に田舎農民の家屋の構造の拙劣なる已に言を要せずして明なり農民は大抵薪炭を以て燃料とし石炭を用ふる事絶えてなし煙突の數甚少く或は皆無なるもあり故に朝夕庖厨にて火を焚く時は烟室内に充満して天井裏など眞黒となり宛煤塗りの如し殊に矮陋の民家に至ては烟甚しくして殆咽ぶばかりなる事あり霖雨の候などは是がために一層陰鬱の氣を増し眼病者を出す事多し田舎の家屋は斯くの如く烟突なき上に厨爐の構造も頗不完全なり竈と稱するものは主要なるものにして此外に七輪居爐裏などいふものあり苟も家をなせば第一に竈を有せざるへからざるものとし古來入戸の數を算するに何戸と曰はす必幾かよと稱す斯く大切なるかまとの形は如何といふに總體を土にて塗り上げたる蓋と戸のなき厨爐にして多く土間



に造り付けてあり又銅壺と稱して銅の風呂を附屬せしもありさて主要の食物たる米は釜と稱する鉄製の器に入れて此竈にかけて炊かると汁煮物も鐵製の鍋にて同じく此竈にて煮らる毎朝每家妻君未明に起きて此竈の前に來り木片を以て火を造り釜を載す然るに此竈といふものは理學的の構造にあらざるを以て一向に火の移らぬ事多し此時には火吹竹と稱するものを口にあて、竈の前に立ち青くなり赤くなり兩頬を膨らして口中より空氣を送る其体裁亦實に妙なり居煙裏は庖厨の用よりは寧暖爐の代に用ふ甚無雜作の者にして太古の狀を存す中央には自在鏡といふものを下け是に茶釜をかけ酒の燗などをし主人は其ほとりに大膝を組みて燗の出來るを待ち子供は母の煮物を盛る側にけろつく様誠に不立派のものなり此外火を造る方法に合ひたるものに七輪と混爐といへるものあれとも是も唯木炭の熱を燗にするのみにして木材には應用せられず其他家内を暖め兼て

煮物などなすものに火鉢といへるものもあり兎に角家屋の構造も古風なるが如く家内日常の器具亦甚古臭く不便少からざるが上に理學の應用甚幼稚なるを以て到底文明的な生活といふへからず是等を改良する事亦農民風俗改良の一部に屬す

### 第七節 執業中の体裁

農事は如何なる種類を問はずあまり体裁のよき仕事にはあらずしかし彼等ほど不體裁極まる風をなすものはあらざるへし彼等は襦袢といふ歴まで來る短きものを着し編笠といふ妙なる笠を被り鐵の如き小き耕土器を以て訖々として働き疲るれば鐵を杖にして立ち休み休みてはまた働き別に勤勞の時と休息の時とを定めず何時にてもおもふが儘に休み又何時にても思ふが儘に働くなり腰をかけて休むにしてもおもひ／＼に休むが故に家族同處に團樂の休みをする事絶えて

見受けざる所なり初夏農繁の期節に當りて遠く田圃を望めば或は編笠を被り麥稈帽を被り又或は菅笠を被り饅頭笠を被れるあり或は何も被らざるあり又袖ある襦袢を着たるあれば筒袖を着たるあり股引を着けたるあれば着けざるあり或は全兩肌を脱ぎたるあれば裸體の儘なるあり婦人にしても筒袖を着るあれば長袖に襷がけなるあり臂を揚げたるあれば臂をまくりたるあり大なる帯を占めたるあれば帯を巻きつけたるあり休むものあれば働くものあり立つものあれば腰をかくるものあり家族の一團亦容易に知るべからず其不規律にして不體裁なる事殆ど名狀すべからず

家内の出業亦實に見るに忍びざるものあり婦人は草綿を績くに木綿車と稱する簡單なる器械を以てす彼等農民の作業衣は多くは此木綿車なるものゝ作用を俟ちて出来上れるものなり故に彼等は休日は何論夜などの仕事に之を績く事甚盛なり又繻縷を取り散らして作業衣

の修繕をなすに晝は玄關先きに持ち出てなし夜は居爐裏のはたに火を焚きつゝ行燈の光にて之を繕ひ之を縫ひ又或は木綿糸を紡くなり男子も亦座敷にて葉細工をなし塵埃を飛び散らす事甚しきものあり彼等の家は物置場寢室食堂作業場客室等を兼ねたる至極便利の構造なれば衣服の取り散らしは勿論彼等が日常用ふる箆籠櫛火吹竹箒等の如きものまでがまきつけてありその上に尙枕蒲團の伸べ流しさへあり仕事もどこかしこの別なくそれらの取撤中あいたる處を撰び席を占めて取りかゝるなり偶客人の來るあればそれらの取散物一切をかき込みて椽側の方に持ち寄せおいでる處にてゐるいけれども少し掃きませうとて客人がそこに居るにも拘はらず掃き始めて却て塵埃を飛散せしむ誠に不都合の至ならずや要するに彼等の執業は甚不規則不體裁にして改良すへき點亦甚夥からざるなり

### 第八節 若者宿に娘宿

男子年齢十五才に達すれば若連中といふ仲間に入らざるへからず是に入るには先身分相應に酒肴を調へ父親に引卒せられて頭取の宅にゆく頭取は之を若者宿に誘ひ連中に紹介して互に愛顧すへき事を誓はしむれば父は我子の行届かざる事をいひて萬事の世話指導を請ひて歸る已にして一酒宴は開設せられ新參は頭取の命によりて買物用達の使に任じ致々として命に従ひ以て愈仲間に入る事を得かくの如くして縁を取るまでは若連中といふ若連中は年齢の多少身分の高下によりて階級を立て一村雄視の主位を保ちて村内各種方面の制裁に任じ善きに悪しきに村風形成の主因をなすなり然るに其家庭の青年は何時まで田舎に居る事なく遠く郷を去りて天涯に負笈するが故に後に残れるは教育の極低度なるか若くは全く無教育のもの、外

あらしざるを以て兎角よき方の主動及制裁とならずして却て悪方向に強曳せらるゝを常とす彼等は休日といへば此若者宿に集りて飲食を思ひ付き或は鶏をたゞき温飴をゆて或は魚を買ひ牛肉を煮て酒を温む酒始まれば必ず歌を謡ひ三味線を弾き或は鼓太鼓を打ち拳を打ちて大興を盡くす而して宿及近隣の娘を引き來りて之に酌を強ふ若應せざれば復讐を試むるを以て止むを得ずして之に従ふ又なかには娘の方より好みて應ずるもあり如此遊興は彼等の父兄も亦公認して更に咎めず何となれば彼等若者にして若しも遊廓に遊び青樓に上らば其散費する處蓋少小ならざるべし是を思へば却て結構なりとすればなり嗚呼又顧みざるの甚しきかな十里の長堤も蟻壠より崩る村郷の酒興遂に遊郎の性を養ひ逸遊荒連終に家も田も末は野となれ山となれに至るを知らず悲むへし若者中酒を好まざるものは茶菓を命じ餅を作る其少しく教育あり高尚なる思想を有するものゝ遊びとして圍

碁を争ひ將碁をさし又或は花骨牌トランプをなすなり兎に角に色と酒とに餘念なき彼等の集合は到底よき結果は生せざるなりそれにしても彼等もしたゞ已れの財を以て正當に飲み且食ふならばまだしもなれども彼等は多勢に恃み腕力に頼りて他家の田圃を荒し果物をむしり茄子瓜を掠奪して宿に歸り是を肴に酒宴を開く事あり或は友人にして縁を取り若連中を去らんとするや婚姻の日に至りて酒を買はしむ若其酒に不足の感あるか或は其人を悪ますとも其家に怨ある時は婚姻の夜に至りて故らに悪口を吐き座敷に砂を撒き井に糞をふり庭に石地藏石塔を運ぶなど誠に不屈千万の事をなすものあり又休業日に止むを得ざる事故のために田圃に出て、作業するものあらんか忽ち藁すしを覆へし庭に地藏を運び糞便を撒き散らすなど誠に蠻風極まる所業をなし而して恬然顧みざるなり運ばれたる大石などを取除くに數十人の合力を要す止むを得ずして是を若者に斷りて

頼む其時斷の料頼の料として莫大の酒を買はざれば應ぜざるなり嗚呼又何たる不都合の極みなるや十二三より十八九の娘子達又別に娘宿といふものありて休みとなればそこに行くを常とす或は互に髪を結び合ひ或はそこにて裁縫をし木綿糸をひく又花かるたとらんぶなどして興ずる事もあり時としては糯を持ち寄りて牡丹餅をなし温飴をゆてなどして會食を企つることあり之を若者の聞く時は早速に酒肴を調へて娘宿に押しかけこゝに男女合同の宴會は開かるゝなり石油の將に火に近かんとするや一大爆發の音を發して燃え上る彼等の觸接蓋是に類するものなからんや其間實に醜行蠻風見るに忍びざるものあり彼等は到底高尚なる男女の會合はなし能はざるなり彼等の會合は醜態汚行を以て終極の快樂とするものなれば其甚しきや言はずして明なり而して彼等の父兄亦是を公認默許して顧みず彼等の醜行は到底止まるべくも見えざる

なり地方風俗の紊亂は多くは此種の若者に基く農民の風俗を改良せんとするもの須く先彼等の風俗を改良すべし

### 第九節 休業日

正月の休みは例外として二月より十二月までは毎月六才の休みとして一日五日十日十五日二十日二十五日の六日各半日つゝ休業するの風あり其上に鎮守祭日祠祭日涅槃釋尊の誕生五節句彼岸社日節分八十八夜土用入はんげれんげ田植祝ひ濕ひ休み二百十日二百二十日二百三十日寒の入り冬至を加へ尙正月の休みを合すれば百十有餘日即ち一年の三分の一を休業する事となる又随分休むものにあらずや休日には若者は若者宿に娘は娘宿に其稍良家の子女のみ自宅に引籠りて諸種の遊藝をなすものあり父老兄母又優々として何もなさずたゞ家に在りて晝寝をなすか然らざれば邸内をぶらつき或は蔬菜園に

遊ぶ位の事なり遠く杖を郊外に曳きて他家栽培の状況を視察し或は都會に出て、諸種工商業の様を見或は遊山を試み名所を尋ね或は神社に参り佛閣を訪つる等の事は夢にだも見ざる所なり殊に子女などの遠くに行くといふは親戚知己を訪つるか或は神社佛閣に参詣する時の外あらず其他はたゞ家に蟄居するのみ夫妻相携へて出づる事甚稀に殊に數日以上の旅行に相伴ふ事は殆見ざる所なり彼等の休業はたゞ骨を休むの外に精神的快樂といふものを得る事を知らざるを以て折角の休日も其効至て乏しきなり彼等は毎日執業と休息とを時間的にせざるを以て其疲れ比較的甚しきものあり故に休日にはよくくたびれて動く事叶はぬ様になる故に彼等の多くは自宅に引籠り蒲團打ち被ふりて休むを習とす彼等は實にたゞ舊習によりて一年百二十日といふ多くの休日に如何ばかり貴重なる光陰を空費するや知るべからず而して一年中僅十餘日の大祭祀日に休む事を知らず彼等

は子供の誕生日には餅を搗きて祝ひ休むしかも長れ多くも 主上の御誕辰に休む事あらず甚しきに至りては肥桶擔ひて馳せ廻るものすらあり何等不敬の極みぞや彼等は淫祠の祭日に轍を立てる事を知れども天長の佳辰に國旗を掲ぐる事を知らず彼等は種蒔植付等の祝に馳走する事を知れども三大佳節に祝酒を擧ぐる事を知らず妄も亦甚しからずや是を教育し是を矯正する夫れ誰の責任や

### 第十節 農事上に於ける迷信

人智未開けざるに當りて彼等が天地自然の現象に對して其解釋し得られざる事には皆以て奇異の感を起し恐怖の念を生じ遂に崇敬の念を發し爰に所謂拜物教なるものを生ず次て彼等理想の靈光即神佛の感念を生じ來り拜物教と結附して不思議なる事恐るべきものは二に以て神の所爲なりとし或は種々奇妙なる臆説を下して満足す迷信は

即彼等が外界百般の事物に對して疑を發し其原因を推究する事能はざる時に於て生ず故に迷信は教育の有無智識の程度如何によりて多少あり農業者に迷信の多き一は智識の低度なるに由るべしと雖又一は農業の自然の力を利用して富の生産に従ふものなれば他の社會に比して自然現象に觸接する事多きが故なり又昔の學者或は施政者が彼等に生活上必須なる事項を説明するに容易に其理由を知得せしむる事能はざるものは彼等の恐怖心を利用して以て神佛の訓戒となしたるにもよるべし農民に迷信の多き其理由既に然り今試に少しく彼等が生活上及農事上に關はる迷信を擧ぐれば左の如し

#### 理由ある者

- A 井中に金屬其他汚物を投棄すれば水神の祟あり (衛生上)
- B 電を不潔にすれば荒神の罰あり (衛生上)
- C 燕家に糞くへは其家繁昌す (益鳥の保護)

D 蜻蛉の背には佛が宿る殺すべからず

(益虫の保護)

E 田の中に黒鳥が巢を営めば實入りよし

(稻の出来よければ葉茂る葉茂れば鳥がすくふ故に實入りよし)

F 苗に俵子がつけば豊年なり

(俵子は青虫菟虫の寄生蜂の卵なれば益虫なればなり)

G 夏の土用五郎に虫送とて神を祭り小き青枝造りの神輿を

担ぎ旗を立て太鼓をたゝき農民各手に松明を照らし谷々

より虫を追ひ出して村境に送りよこにて神輿も旗も悉く

焼き拂ふ其時の叫び言

送るは送るは實盛送るは

(火を點するによりて實盛即大横道及蝦虫の第二次蛾の誘殺なるべし)

H 雪は豊年の兆

(用水に窮せざるこゝ及寒さのため害虫の死するこゝ及養分を地面に與ふが故なり)

I 正月元旦の朝の鳥の鳴聲は其年の米一俵の價なり

J 正月爆竹の時炙り餅の大割れは其年豊年の兆なり

K 正月の元日に西風吹けば其年は豊かなり

ニ 正月の八日に雨降れば其年早魃なり

ホ 三月の節句に雨降れば米價騰貴す

ヘ 五月の節句に雨降れば米價下落す

ト 正月親戚の内にありきして逗留すれば苗の根長し

チ 朝繩に夜蕪焼くべからず

リ 夏の土用三郎に雨降れば土用間雨降り續く

ヌ 梅雨中に雷轟けば其年は早り

ル 節季に白湯を飲めば人より無實の事を言はる

ヲ 節季に茶椀を叩けば借錢取りが来る

ク 家庭に柳の木を植うれば其家榮えす

カ 家庭に柚の木を植えて擔捧位に生長すれば主人死す

コ 家の近傍に批把の木あれば其家貧し

ク 神佛の祈禱札を田の中に立つれば稲に虫つかず

レ、鶏宵に鳴けば不吉あり  
 ヲ、夜口笛を吹けば盜賊來る  
 ツ、鳥の鳴聲悲しければ人死す  
 ネ、初冬黒鳥肥前鳥が騒げば大荒がす  
 ナ、家に病人ありて呻き聲すれば南瓜繁茂す  
 ラ、旅するに行な十七日歸るな二十五日  
 ム、朝茶三杯其日の難を逃る  
 ウ、膝塗(十二月一日)に餅を膝に塗れば田に轉ばす  
 非、夏土用の牛の日に田螺を食へば藥となる  
 シ、土用入に小豆とにんにくとを生にて吞めば疫病にかゝらず  
 オ、鵲鳴けば大風吹かす  
 ク、下り蜘蛛は吉兆なれば袂に容るゝか惠比壽に奉るべし  
 ヤ、正直者が大根播けば味よろし

マ、批把は植ゑたる人の死せざれば實らず  
 其他數へ來れば實に數限りもなかるべし是等の迷信は彼等殆り先天的に腦中に固定し居るを以て容易に打破する事を得ざるや明なり然りと雖も農業の改良は先彼等の迷信をして漸時打破する處なくんば到底其効を奏する事難かるべし實地教育の任に當る人宜しく是等の研究を忽にすべからず

### 第十一節 祭例の景況

日本の神社は歴史前に於ける創世時代の功勞者及歴史後の英雄等を崇拜して其靈を祭り或は墳墓を以て社域となすものあり一年に一回或は二回つゝ祭典を行ふその儀式清嚴にして何人も崇敬の念を起すを常とす併田舎の祭例に至りては寧ろ風景と謂ふべきものあり祭日は二日或は三日に亘り日本固有の軒提灯を吊し種々の裝飾を行ひ各



辻々には假屋を造り床を張り其上にて觀るに堪へざる風采の下等なる男が或は髻をまくり又は肌を脱ぎ下帯を現はし向ふ鉢卷きにて太鼓笛及磨鐘を鳴らし以て馬鹿囃しを奏するあり又或辻にては同様な臺の上にて異様な面を蒙り奇装をなしたるものが馬鹿踊りと稱する滑稽にして甚卑陋なる踊りをなすもあり又二輪加と稱して男子女装し女子男装し皆白手拭にて顔をかくし或は上等の織物を以て極下等なる妙なる衣服を造り車夫馬丁の如き風采をなして歩むかと思へば大なる夜具を着て行くあり巡査の装をなして罪人を追ひ行くが如きあり學生の風をなすあり若且那の風をなすあり多くの高張を捧げ醜業婦を先頭に立て三味線太鼓を幾つも合せ歌を謠ひてさわき廻るなり見物人は山の如くに押しかけて行列に加り喧々囂々として紛擾日はん方なしかくて社境に入り人込み多き中に立ちて諸種の藝を演じ拍手喝采の中にさわきつゝ歸るなり又別に地走り底抜け踊り屋

臺荒神神樂等を演ずる事もあり又角力芝居を興行する時もあり兎に角祭例といへば各戸共親戚知己を招きて馳走をし主客狂酔の儘に各種の餘興を演ずるものから其雜鬧混雜日はん方なく諸々方々に喧嘩起り口論始り或は血を流し或は倒れ警官の奔走盡力實に容易ならず其家の子女は難を避くるがため屈強の供を連れて参り早うして歸途に就くもの多し如此蠻行醜態を白日の下にしかも神聖なる神社の境内に於て演ずるとは果して真に神を敬するの道なるか祭典は禮儀の基礎なり餘興というても程があり汚行醜態必ずしも神の好むところにもあらざるべく亦人の撰ふところにもあらざるべし是を矯正し是を改良する亦目下の急務ならずや

### 第十二節 田舎芝居に花角力

田舎にて田舎芝居として下等なる俳優が祭日或は祝日に興行する事あり

り是には請けと雇との二法あり雇芝居の時は村内の大家を假り受け家の中にて興行する事多きを以て其次座或は庭内に於て見物するなり是が費用は民等割或は貴賤相應の寄附金によりて施行せらるゝを以て富人貴士のために良席を占領せられ賤民は不自由ながら後方人込み多き中に立ちて觀さるへからず又請けとなれば別に小屋を設け木戸錢半疊料を徴集して行ふなりさて芝居があるといふ事を傳へ聞くや皆々大喜びにて若者は斬髮娘は髮結に忙はしく家婦は酒肴の用意に取急くやがて夕刻に逼れば老人を留守にして壯年以下は一家打揃うて重箱飄箆を携へて劇場に向ふかくて日暮れ人集まれは開演す劇場の音楽は舞臺の左右に於て觀客に隠れて奏出し始む樂器は太鼓數笛鐘三弦琴鼓弓等あり又淨溜璃語りと稱するもの正面右の方の高き處にて三味線に合して演劇の筋を語り踊の時は左の方にて歌を謡ふ又花道と稱するものありて劇場中觀客の最多き土間の左右に道を

造り粉装せる俳優此道より出入するなり元來演劇は國民の人情風俗習慣禮儀品行等道德に對する其時代の流行と嗜好とを示せる感情の反映なれば農民には農民に都會人士には都會人士に適するやう行はる故に演劇と觀客の喝采不喝采を見れば凡其地方人の道德の程度を推知するに足るべし然るに大抵は男女の關係にして慘酷なる強姦苦辛せる姦通醜業婦の醜態等の外偶竊盜人殺等の慘劇を演ずる事あるのみ男女の情を寫す事其極端野卑なると同時に殺伐刃傷の光景を寫す事も亦頗極端にして殆見るに忍びざるものあり或場合には於ては人を虐殺するに手足を一々切り殺すの苦痛を示し或場合には殺したるものゝ面を剝ぐが如き殘酷なる所業を行ひ十人斬七人斬などと稱して舞臺一面に血を流す事あり其殘忍暴虐殆筆紙に盡し難し觀者をして之がため神經を劇刺せしむるの害大なるのみか風俗を敗りて無智の人民に野蠻の舉動を教ふるの道となるべし其他の場合と雖不禮不

品行不行儀なる國民の反映として舞臺に演ずるところ盡く野蠻の域を脱せず都會ならば警官の干涉宗教家の議論等の批評に亘るべきも田舎の事にしあれば駐在巡査も敢て咎めず誰とて之を見て異様に感ずるものなく皆面白かりき憐れなりきと評するの外あらず實に百道徳の教を學校家庭になすとも一日の芝居に全く極き消さるゝものと謂ふへし諺に曰く芝居は馬鹿が見るものにして角力は賢者の慰みなりと余其理を糺すに明治政府の世となる迄は芝居は全く非人乞食のなすものにして士君子淑女が見る者にあらずとなし素町人か下流社會の外には足を入るゝものなかりしが故に其なす所如何に野卑下等なりとも政府は一切之に干渉せず従て俳優の性質は淫奔醜陋にして殆畜類同様に扱ひ居りしものなるに時勢の變遷に伴ひ觀る者の區域の擴りて其家の士女迄が出入するに至りしにも拘はらず演劇の筋は舊態を存し俳優の素行も依然乞食時代と異なる事なきなり如此俳優

の演ずる所猥褻卑陋なるが上に觀客も亦實に野蠻的の行爲少からず先幕の開かざる間はがや／＼として人を呼ぶの聲喧々囂々耳を聳せんとす身体動作頗無作法にして或は他人の足を踏み他人の衣服を破り或は塵埃を立て或は徳利を覆へし皿を毀ち又或は臂をまくり腕を現はし甚しきに至りては肌を脱ぐもありやがて重を開き瓢を傾くるに至りても子供は騒き親父は怒鳴り女房は人に酒を勧め飲まぬといふを無理に強ひ食はぬといふを無理に與ふ其間双方の争ひ叫ぶ聲誠に喧しやがて幕の開くにも拘はらず舞臺を後に醜業婦と酒を飲む客もあれば又穢れ騒ぐもあり子供亦親父の感化を受け居るを以て或は小便に行くといひ或は物が食ひたしといひ菓子を買ひてくれ梨が欲しといふ此強請には親も甚困るなり遂にはいひて聽かぬからとて頭を叩けば子供は泣きたす泣けば愈怒つて叱りつくといふが如き有様なり誠に立派なる家庭の訓育を多人數の他人の前に演出しそれにて

も赤面もせず悪き心地もせざるは平氣なるものなりかゝる時は又一部落と他部落の若者の間に醜業婦につけて喧嘩を始むるあり我れの已れの馬鹿だの阿房だのといふ聲が聞ゆるやうに至り遂に腕力沙汰となりて掴み合となる事あり誠にはや何とも謂ふ様なし彼等はそも何のためにか劇場に来る酒を飲む爲か喧嘩のためか一向に解し得ざるなり田舎農民の無雑作なる卑猥なるはや言ふ能はざるなりかくて演技終れば我さきに歸らんとして子供が履み潰ぶされんとするあり老人の足を履みて走り行くもの良家の子女に觸れて倒すものあり誠に大なる野蠻と謂ふべし

又田舎には祭日或は祝日に花角力といふものを行ふ事あり是は地方の若者角力にして勝ちたる方に花を出すなり是角力を行ふには先諸方に廣告紙を貼り付くるなりかくて村中より應分の酒或は金錢の寄附を募り夜の至るを待ち人集めとしてまづ萬燈を明す事あり萬燈は

蠟燭或は石油を田圃の中央を流るゝ直き河堤に正規の間隔を取りて装置し一時に之に点火するなり其數千を以て數ふるに至る事あり村内のものはまづ之を見んとて出て行き遂に多くの人數が集合し來るに及へば他村よりも澤山に團體をなしたる若者が入り來るそこでぼつ／＼始め出し他村のものには勝ちたるものにも負けたるものにも花を出す通常勝十五錢に負五錢位なりその上に角力を取りたるものには酒を飲ませ握飯を饗應するなりかくて夜も更け角力も終らんとする頃に至れば必喧嘩を始む委細に觀察すれば其原因たる或は此村の娘を引張つたりとか花嫁にぶつかつたりとか或は己の村のものは弱虫許りといひしとか負けたりとか勝つたりとかなんとかかとかなんでもなきことよりして喧嘩を始め遂には拳骨を張り合ひ掴み合を始めたし或は焚きさしを投げ石をほり双方共にかゝりになりて手向ひ又それ仲裁せんとて出るもの却てあべこべにやらるる事あり娘は

母は泣き若者は罵り親父は怒鳴り遂に又一の修羅場と化す田舎の無教育者ほど仕方のないものはあらず何にか多人數寄り合ひたる時は必未は喧嘩にて別るゝの習なり何分譯の分からぬに以て行き極田舎的の狭い丁見にも感情的ときてをるから其爆發する事の烈しき實に其夜其日の出来事にあらざるなり彼等は何時にもかゝる悲劇を演ずるに適したる性格を有し居るなり田舎民の教育上最も注意すべきは實に是等の點にありて存す

### 第十三節 婚姻の有様

早婚の害ある事は申すまでもなき事ながら田舎には妙なる習慣ありて可成たけ早く縁に就くを以て名譽とするの風あり故に女子にして早きは十四才にて已に結婚するものあり勿論今は民法上の規定にて女子は満十五年に達せされは戸籍上の結婚をなし得ざる事になりた

れとも所謂儀式上の結婚は敢て咎めざるを以て内分の結婚甚多し蓋女子二十歳を超えて猶結婚せざる時は或は血統を云々せられ或は娘に難癖をつけらるゝといふが如き有様なればなり従て教育の如きも大抵十三四才迄にしてそれよりは裁縫専門の教師に托するもの多し又實際その年頃となれば嫁入掙と稱して成人の衣服地を購入して之を調製し簞笥を求めて之に納め置くを常とするが故に是等の衣服を手傳つて裁縫教師に縫うてもらうの便利もありもとより是は中流以上の家庭に於ける女子の事なるが極下等に至れば或は子守のため奉公せしめ或は手前にて草刈機織の替古をなさしむるが故に裁縫の技術もたゞ僅に祖母或は母に夜なべ仕事に聞く位の事なれば針の道行も六には分らぬ位なるに早已に十五才に達すれば貰ひ手だにあれば深く縁合の良否を考査するといふ事もなく直に約束をなすなり中流以上に至りて始めて血統を尋ね男子の教育性向兩親の素性資産の

程度を確かむかゝて双方共によしとなれば約束の証據として結納といふものを取り換はす是には媒介人が干渉して身分に應じて男の方よりは女の方より價値多き着物羽織帯などに樟肴八木祝儀未廣尉斗鷄昆布等を揃へて送るを常とす女子の方よりも亦しかくして始めて此に結婚の約は成立するなりかくて吉辰を定めて愈決行日となれば双方共に親戚知己を招き種々の馳走をなし女の方にては娘の衣裳荷物の調整等に忙はしく男の方にては女の方よりは一層の騒ぎにて多くの働き人を使ひ家宅の掃除裝飾は勿論家具家什の取揃酒肴料理の事に取急ぐ下等民なれば此日男は婿入りと稱して兩親及媒介人に引卒せられてまづ女の家に入るかくて婿は適當に馳走に預りたりと思へば一同よりは少し早く歸りて女家馳走向き振前方を話せば指圖役たる親戚の者之を聞き取りて一々女家に負けざるやうに取計ふかくて夜に入り女は男の兩親及媒介人に先導せられ生みの兩親親戚知己

腰元に擁せられて髪飾衣裳等美しくして附き従ふ其あとさきに人足が箆持參籠を擔ひて行く良家になれば衣裳箆等の三四箇に化粧箆等一箇長持二箇狹み箱五六に釣臺三箇位を下僕出入りのものに擔かしめて行くなり人足は道中孫節と稱する祝言歌を絶え間なく歌ふかくて男家の門前まで至れば内より待客と稱する者が禮服をつけて出迎ひをなすかくて嫁御は直に嫁部屋に入り荷物も亦部屋の押入に收容せらる他の客人は悉應接間に通され次に式室たる客間に通さる一座揃へば綺羅粉粧を絞れる一個の美人は茶を持ち出て一同に禮拜すやがて親戚家族順次に席に着けば母姉なる人は婿殿を連れて出づ婿殿の服装は黒の紋付羽織に袴なり次に嫁御が母腰元等に擁せられ振袖といふ長裾長袖の紋付着物色は黄赤白の三つ揃に頭に白き棉帽子を頂きて出づかくてまづ落附の餅といふを出し次に吸物膳を出し慰斗をひく終て渡しといふ祝酒の入れてあるもの及取肴の載せら

れたる三寶及三つ組の杯臺をば始めの美人と外一人の美形が持ちて出つやがて指圖役の指揮に従ひて杯をさす此杯は三々九度の杯といふ夫婦の杯にして一同のものも其杯を頂くなり此時四海波靜になどいふやうなる謠ひを歌ふかくて杯終れば嫁御は部屋に歸りて更に衣服を着換へて出づかくて廣盆鉢臺などいふものに着鉢を載せて出てそれより酒を注ぎ廻り三味線を出し鼓太鼓を打ち出す何ぞ圖らんやささきの杯の酌に預りし美形が徳利を持ち廻り三味線をとりにて歌ひ始むとは嗚呼是れぞ近郷飲食店の醜業婦なるかな醜業婦を祝言に侍らして其杯を司らしむる事一般の習慣とはいへ結婚の杯は人生の一大事しかも神聖此上もなきものなり謹み畏みて清めたる上にも清めざるべからず而して此杯を獸行醜業極りなき醜業婦の手によりて行ふ何ぞ顧みざるの甚しきや滑稽も亦甚しと謂ふべしかくて弦歌の聲は諸方に起り席亂れ杯飛び人足はかゝる時こそ飲めや騒げや打てや歌

へと大狂ひ接待人酌婦は主人の命を承け居りて人足を勞りはやし上を下への大騒ぎ是に近隣知己の御賀びとて來りしものにて席は益盛になり行き飲んだ食つたて三日三夜も打ち續くなり嫁は結婚の翌日に姑に従ひて其地の鎮神に參るを例とす其時も別の衣服に着換ふるなり三日目にも姑に従ひて近所隣の挨拶に行く其時亦着物を着換ふる如くにして衣服の多きを誇るなり教育のために費す金錢は惜くとも嫁入拵に投ずる金錢は少も惜まずこれがために數千數万の大金を投ずるもありといふ馬鹿氣たる事にあらすや兎に角今日の結婚に就きては改良すべき點少からず實際社會の教育に任ずるもの宜しく考慮すべし

## 第十四節 葬禮の風俗

人死すれば隣保組中より各家一人以上集合して穴堀喪言ひ買物寺迎

禮場係厨房係花方等の役割によりて各専門に事業に勉むかくて親戚も集り僧侶も来り屍体を棺に納むれば僧侶數回の讀經を終へかくて愈送棺となる棺は白木の輿にして之を昇くには重なる血族のもの或は下僕を以てす昇者は皆白色の外套を附け黒色紙張りの帽を冠り頗る緩に繰出す行列の順序は先導に大松火持次に造花籠供物位牌其次に導師葬主男の血族次に棺輿次に女の血族次に親戚知己下婢僕等なり其間には白張りの高張提灯紙製の龍數流の紙旗を挿む男は丸て黒服をつけ女は白服を纏ひ白棉帽を頂く故に其儀式服装均一ならずして屢混雜を招く事少からず行列の道中無音にて進行するものあれば奇妙なる響を發する音楽を奏するあり行列一同に念佛を稱へつゝ往くあり墓所に着けば導師奇妙に大なる聲にて引導といふものを言ひ渡す事生きたる人に物言ふが如しかくて又讀經し後之を葬る葬りて後一同に立ち去るやあとには韻々たる燈籠の光影微かにして千萬

無量の悲觀を印するのみ悔みには香典といひて禮場に持ち行けば係の一人が總指揮となりて其係の人に依頼するなり酒を取り寄せ油揚げ豆腐昆布蕪温飴素麵等を馳走にす極貧者の雇はるゝものは酒肴を充分に饗せらるゝを以てよき口肥したりとてよろこぶものあり又料理の残り握飯の残りを持ちて歸る等の事をなすものもあり人の悲み混雜に乗じて私利を謀る何たる不都合の極みぞや田舎民は實に他人に對する同情に乏ししかも婚姻葬祭は人世吉凶の最大事なり之に對する同情心あらざるものは畢竟人間にあらざるなり心あるものは此方面に於ての改良を講ずべし

### 第十五節 農民の禮儀

一般に日本人の禮儀は禮儀にあらず殊に田舎民の禮儀は卑屈極まる



なり禮讓は内心恭敬の意を表すれば足れり徒に頭を下げ腰を屈むるを以て禮儀の當を得たるものとなすは誤れり然るに彼等は人に會ひだにすれば頭を下げて物を言ふ一日田圃の往來にも數拾回の低頭屈腰をなし路傍に立ち留まりて種々の雑話に優々たる事ありろれがために多くの時間を要する事實に少からず又彼等は人だに見れば善惡共に笑ひ怒られても嘲弄せられても笑ふの風あり日本人の作法禮儀は大概卑屈にして獨立の人間として見る事を得ざるもの多し殊に田舎農民の風采の昂からずして猿の如く犬の如き舉動をなすは畢竟心に獨立確乎の精神なきに由るとはいへ又實に禮法の卑屈なるに基せざるへからず彼等は實に己を重しとして自人品を保ち天賦の人權は徒に他人に譲らすといへるが如き凍たる風采の存するもの甚少し現んや中流以下に至りては人を見る度毎にせしら笑をなし頭を下ぐるが故に都會人士の眼中には如何に見慣れても己れより數等以下の人

類の如く見ゆるなり是誠に農民のために不利益なる處にして彼等が市中に物を賣捌くに當りても機智に富みたる都會商人は田舎民の猿今日も亦一つ冷やかしてやらんなどとて不當の相場をつけて安價に強ひ買ひする事あり畢竟するに彼等に獨立の精神なく又風采の昂からざるものあればなり風采の昂らざるは禮儀作法の卑屈なればなり願くは男となく女となく伸々如として壯快の態度を取り常に活動的風采を現はして他人の輕侮を受けざる様にする事蓋文明國民の必要の條件たり

### 第十六節 農民の社交

日本人は概して該話好きにして二人以上集れば必雜談を始め日の移るを知らず時としては大切の用を打捨て話に身を入れ約束の時も食事の時も違ふ事あり況んや田舎農民に於ては日常の起居動作といふ

もの誠に不規律にして且緩漫なるを以て一層に雑談或は愚圖に  
貴重きちゆうの光陰こういんを費す事多し他人の家に行きては優然ゆうぜん長尻ながしりをなし更に氣  
の毒どくとも思はず又主人も他に用ある人をもおき止めて晝間酒を振舞  
主客しゅかく陶然たうぜんとして日の暮るゝを知らず如此は訪ふ人も訪はるゝ人も迷  
惑まごならんと思へとも一向に頓着とんちゃくなく平氣へいきのものなり又農民は農閑期  
には夏忘なつわすれ秋忘れと稱して親戚しんせきを招きて酒宴しゅえんを張る是等の酒宴には  
大抵男子が應招するの例なるを以て婦人は里行き祭日の外あまり外  
に出て社會しゃかいに顯るゝ事なし故に婦人は常に快活くわいかつならずして世事せじに疎  
し男子は之に反して皆饒活じょうかつなり話の種は何時にても上等のものあら  
ず男女同席どうせきなれば好みて淫猥いんわいを談じ婦人をして失笑しつせうせしむるを樂む  
ものあり男子社交の遊戯ゆうぎには碁將基ごしやうきトランプ骨牌こつぱい園藝えんぎ美術品びじゆつひん茶湯ちやとう等  
あれども婦人の社交機關しゃかいきかんは殆皆無たいていむなり又男女に關らず神聖しんせいなる社交  
場ばともいふべきものなく若き男女に限りて若者宿娘宿わかしよじゆぢゆくといふものあ

れどもこは却て彼等が風紀紊亂ふうきそらんの場所にかゝれり中年以上の男女に  
至りては樂み若くは慰なぐさみといふもの一も備り居らず都會とくわいならば公園  
にあそび或は其他集會しゆくわい所じよに行きて種々見る事も亦なす事も多かれど  
田舎にては此等の機關きかんに於ては皆無たいていむなり音樂おんがくといひても三味線鼓さんまいせんこの  
如き卑猥ひわいのもののみにして高尚こうかうなるものとは一もある事なし音樂  
の公開堂こくかいどう共同遊戯場きゆうどうゆうぎばうの設置せいちの如きは誠に目下めげの急務きふなり

### 第十七節 犯罪と嫉妬心

殺人さつじん毆打おうち自害じがい盜死たうし投水とうすい情死じやうし放火はうか等は之を都會とくわいに求むるに少くして田  
舎いんに求むるに多く田舎新聞の雜報欄ざうほうらんは殆是等の事實を以て填充てんじゆせら  
れざる事なし而して其原因げんいんを探究たんきゆうするに男女の關係くわんけい殊ことに嫉妬しつと的てき根性こんじやう  
よりして起る者多し田舎人民の心は偏狹へんきやくなり彼等は自然の窮屈きゆうくつなる  
小天地せうてんちに生活して未社會みしゃかいの真相しんじやうを味ふに由なくために識見しきけんは小に度

量は狭く従て彼等の快樂といふものは酒と色との外あらず物質快樂のためには彼等は身を以て之に當れとも精神的には一もなす事あらず彼等の精神は感情的にして理性的ならず理想は低く識別はなかつた無鐵砲の考を以て酒色の奴隸に甘任す彼等は天下の人民に先ちて働き天下の人民に優れて艱難す彼等は何のために働き何のために苦むや彼等は實に酒のために又女のためなり彼等には社會公共のために之をなし國家全體のために之を勉むといふが如きは夢にだも求むる事を得ざるなり彼等は如此自個一身の利慾のために快樂のために幾多困難の事業に耐忍す而して其娛樂たるたゞ二あるのみ何者か此二つのために全力を注ぎ勢力を集めざるものあらん彼等が此に集中するもの寧自然の當理なり故に彼等にして一朝己れの愛撫する妻女の他人のために翻弄せられ蹂躪せらるゝことあらんか實に身命を屠して其制裁に任ずるを耻ぢとせず又彼等妻女に於ても教育なく識

見なく貞操なきの浮者なれば時の風の誘ふが儘に心を動かす事草葉の風にそよぐが如し彼等の毆打殺人は是處に生ずるや多し又彼等は處女と通じ人妻と姦す情極りて人世の無常を啣つ是情死の止むべからざるに至る所其人の妻にして他の男と通じ之が本夫に知られたるとき又面目を失して自害縊死を企つる所以なり一夫二婦と昵めば一人は嫉妬を以て他を害せんとす夫他の女に通じたる時其妻亦之に同く妻の姦通に於ける夫の所爲亦之と同じ夫婦の喧嘩は田舎の名物なりしかも其原因殆皆嫉妬なり即犯罪のもととは全嫉妬心ありと謂ふも妄言にあらざるべし

## 第十八節 家庭の教育

教育の素養なきもの教育に注意する事素より其難しとする處なり彼等には殆目に一丁字なきものありかゝるものに限りにて社會の眞想を

味ふ事能はずたい彼等が自生的精神即本能的衝動の向ふが儘に行動するを以て彼等の子弟を育つるもたい食物を與へて養育し早く生長して彼等の勞力を助けん事を願ふのみ其精神的修養によりて品格を造り世に處し事を行ふに當りて聊男子と生れ出でたる甲斐ある働き振をなさしめ小にしては一家のため大にしては國家のため己れの義務を盡さしめんとするが如き考は毛頭だもあらざるなりよしかゝる希望を抱かざるまでが父母自和樂の道を盡して良風を示さんには彼等は自感化せられ指導せられて良品性を生形すべきも如何せむ彼等の家庭は常に風波荒くして喧嘩口論の絶間なきを以て彼等の教育も全く自然の儘に放任せられ悪友と交るも悪人と伍するも酒を飲むも菓子を買ふも一言以て咎むるなし故に虛妄陰惡至らざるなく構梁暴厲飽く事を知らずかくて子女若親の命に忤ひ意に従はざる事あらんか父母は腕力を以て之に迫り或は頭を叩き尻をなぶり外に引き出

し押入に入る甚しきは樹木に縛り倉庫に幽す子女叫鳴の聲漸く枯れて呻吟の聲に變するに至りて始めて其縛を解き其扉口を開く父母の此手は始めは奥の手たりしも未遂に常事となりて少しのいさかひ僅かの立腹により忽ちにして拳骨となり結縛と化す偶母の子女に同情を寄する事あるや母も亦子と共に此嚴刑に遭ふ子の嚴刑も母たる人の連れあれば敢て深く己れの罪を悔ゆる事あらずよしや父母共同の嚴責と雖其度重ぬるに従ひ彼等の感情は既に峻酷峻忍に傾き訓狂以て平氣に澄ますに至る藥如何に病を癒するものなりとも是を用ふる瀕繁ならば未遂に利かざるに至るが如く嚴刑峻罰も狂れては却て腋下の痒さを感じるに過ぎざるへしかゝる訓練法を受けたる子女の學校に來りて教師の命に忤ひ校規を冒して罰に遭ふや學校の罰は直立留置に過ぎず蚤の食ふとしも感せざるべし家庭の教育は感情の平靜を主眼とす意志の調節を以て本旨となす而して彼等却て是を害し是

を損ふ他日強盜殺人等の罪人を出す蓋自然の勢なり家庭教育を云爾するものまづ彼等の頭を改良すべし彼等の頭を改良するものまづ家内の喧嘩は人間の一大耻辱たる事を感知せしむるを要とす

### 第五章 農民社會の改良

#### 第一節 家屋の改良

日本家屋の構造の美術的ならず理學的ならずる事は既に論述せし處なるが殊に田舎農民の家屋に至りては家は以て雨露を防くに足り室は以て眠を貪るに足るを以て得たりとなすものゝ如く其家火難を防ぎ風震に動かず各室各其目的によりて装置せられ厨房の整頓炊器の輕便等に美術を加へ理學を應用するが如き事は夢想だも見る事能はざる處なりもとより是等の事を獨農民に責むるは殘酷なるべく其論ずるものは工藝の發達にも推及すべけれども日本は古來美術國とし

て世界に鳴響けるもの少しく注意する處だにあらば美巧を盡くすは蓋難事にあらざるべしたゞ理學的の知識に至りては輒近三十年の今日漸く發達の機運に向ひかけたる處なれば今敢て急速の改良を望むべくもあらずたゞ此より後に建築せんとする家屋に向ては材料の如何を論ぜず其構造に於て改良すべき必要ありと信ず今其重なるものを擧ぐれば左の如し

第一に改良すべきは煙突と竈との構造なり

竈をして今少く空氣の流通をよくせしめ始終側に在りて焚かなくとも時々薪炭を投ずれば危險なく容易く燃えて火力他に移らざる様にするべし又煙煤の室内に擴散する事なくして直に煙突に收容放出せらるゝ様にする事肝要なり

第二空氣の流通光線の透射をよくすべき事

田舎民の家屋は家低く窓少きが故に空氣の流通甚悪しく其上内庭に

於て葉仕事或は稻麥のこなしをなすを以て塵埃の飛散甚多く且煙突  
竈の不完全なるよりして煙煤炭酸氣の鬱閉する事甚く衛生上甚害あ  
り又光線の透射乏しさが上に障子紙が煤煙のために黒變して室内の  
暗き事暗室かとも思はるゝ程なれば家を高くし窓を多くし欄間を設  
けて光線及空氣の流通に備ふべし天井の四隅には必ず空氣抜きを設  
くべし家の北方或は光線不足の方には殊に多くの窓を設くべし

第三物置場稻扱場を別設して内庭を縮小すべし

物置場或は稻扱場を設けずして内庭は稻扱場ともなり物置場ともな  
り混雜紛亂窮りなし規律的の習慣は事物整頓の中に於て養成せらる  
故に宜しく内庭を縮小して物置稻扱場等は別設にすべし

第四應接所を設け卓子椅子を設置すべし

此方輕便にして且寢轉長尻雜談をなすの惡風を打破する事を得べし  
且又一には規律的習慣の養成上必要の事なり

第五女子のために裁縫室を設くべし

女子は内業を掌るものにして殊に裁縫は女子の本職なれば女子のた  
めに特に室内に作業場を設くるの必要あり而して裁縫室には卓子椅  
子を設け是に由りてなさしむべし婦女子體格の保護上誠に目下の急  
務なり

以上はたい家屋の改良に就きて其梗概を列舉したるに過ぎず其他暖  
地雪地及風多き地方地震緊き地方などに於ては自然に特別の構造を  
要するものあるべし要はたい今少く理學的の建築に美術的工夫を加  
ふるの緊切なるのみ

## 第二節 衣服の改良

衣服の改良は近年社會問題として餘程入釜敷なり來れる様なり殊に  
女子衣服の改良につきては餘程研究せられつゝあり近來女子の改良

服と稱して日本在來の筒袖に袴を穿ちたるの服裝が出来て居れども、たゞ偶兒女の間に採用せられたるを目撃するのみ農民の衣服は兎も角も作業服に至りては無論急速に改良すべきの必要あり農民が今着用しつゝある筒袖をば洋服の上衣となし股引をばズボンとなすが如く脊廣仕立に改良すれば上品にして且便利なるべし同材料を以て造るに不體裁のものを造る誠に不利益の事なり一般農民の服裝を脊廣服にして脚絆足袋の扮装にせばいかほど彼等の品位を上すかも知れず服裝は大に其人の品格に關す子弟の農業を厭ふ蓋不體裁の風をなして自品位を保つ能はざるを目知するにも由るならん女子の仕事服も上を筒袖にして下袴を短くし而して脚絆足袋を穿く様にすれば如何ほどに輕便にして又品がよろしきか知るべからざるなり是が改良服を考按する事は誠にやすし彼等は輕便にして又品の善き事を知るのみにして是を實行する事に於て甚怯懦なり是迄未つけざる者をつ

け着ざるものを着るは何だか妙なる感じがするといふ様な風あるは誠に田舎人の缺點なり美に就き便に従ひ品を保つ他人の嗤笑を如何にせむ笑ふものは笑はずべし凡て何の改良にても各人の意志によりて實行せられ能はざるものはなし工夫考按は難しとも出來たるもの、善に就き美に従ひ便を求むるはたゞ其人の精神にあるのみ

### 第三節 食物の改良

農民の常食とする所は米麥野菜類なり肉類としては僅に魚肉を食ふに過ぎず近來の統計に由るに日本人が一ヶ年に食する牛肉は平均一人に付僅に一斥弱にして是に馬羊豚兎を合しても二斤に過ぎずといふ然るに英國人の如きは獸肉一ヶ年一人に付百四斤にも及び其他の國と雖も文明國と呼はるゝ國にありては五十斤を下る事なしといふ尤も日本人は魚肉を多く食ふが故に平均一人に付一ヶ年の魚介類の

消費凡三貫五百匁なりといへばそれを加へて見ても猶僅々三貫七八百匁を超えず西洋人もなか／＼魚肉を食ふを以て肉類消費の全分量に比すれば日本人は西洋人の三分の一以下なり又牛乳の如きは從來全用ゐられざりしも近來都會近傍にて飲用するに至れり是れも一人に付一年に平均二合位を超えず歐羅巴中多きところは人口一人に對して二石以上産出し通常の處にても一石位を出すといふ今假に一石としても日本に四百倍の多きものあり鶏卵の如きも歐米中は一ヶ年一人に付八九十個の割合となれども日本人は僅に十個に過ぎずといふ如此日本人は滋養物の攝取に於て歐米人に劣る事幾倍なるを知らず而して實際日本の農民にして牛馬を飼養するものは是等の肉を食ふ事を忌み乳を飲む事を嫌ふの風あり鶏卵の如きも事代主命を祭るものは同神の嫌なりとて食はざるを常とす故に農民の肉食は深山幽谷に住ふものの僅に小獸を狩り鳥類を獵して食ひ海邊に住ふ者の個

魚肉を食ふ事あるに過ぎず故に彼等は色は黒けれども肉は太らず仙骨稜々として瘠せ我慢の風あり彼等の活動性に乏しくして懦弱なるは一は粗食なるにも由くべし家鶏を飼ひて邸内の落ち殻を拾はしめ牛豚を畜ひて厨滓麥類を給しなば格別の雜作にもならざるべし而して之を賣り之を屠して時々の食膳に上らしむるあらば彼等の肉は太り彼等の皮膚は澤つきて自活動的に赴くべし青菜に麥飯位にては到底元氣も付かざるなり食を奢るは決して不利益ならず奢るとして何も精巧の美味に飽くべしとにあらずして滋養物を攝取すべしとの意なり滋養物を食ふだけそれだけ自活氣を帯びて仕事に現はれ來る眠れる國民は今駄目なり明治立憲の聖世には活動的人物ならては不用なり孔子の惡衣惡食を耻づる者我共に語るに足らざるなりとの鍼言は三千年も前の昔の事なり今に適用すべきものにあらず酒も日本人は酒精分の多きものを好む様



なれども害あり麥酒は米酒に比して酒精分少し是を適量に用ふるの習慣を養ふへし茶も大抵は自宅に於て製するか或は組合を設けて製出すへし茶の葉にもあらざる番茶を買うて飲用するは今の人間のすべき事にあらざるなり

#### 第四節 家庭風紀の改良

田舎民家庭風紀の保たれざるは主として家婦の無教育なるに由る男子は猶世間に出て、社會の人々と交際する事あるを以て聊事理を辨ふありと雖教育なき世間知らずの曠程仕方のなきものはなし小供に向ひ夫に對して入釜敷事いふのみにして何の役にも立たぬなり家庭の秩序を保ち風紀を善くするには夫は夫の權利と義務とを明にして寡言沈重の態度を保ち婦は和樂愛情を主として子女を叱からず言ひ度き事も少し扣へ目にし腹立ちたる事も心に押へ堪ふる様にするに

あり如此すれば自然と上下の秩序が立ち和氣靄然美風四隣に喚發すべし老を敬ひ下を撫し身を以て子弟の模範を示す事亦誠に切要なり

#### 第五節 執業休務の規律法

朝は大抵何時に起きて朝間仕事に幾時間を費し午前中の執業は何時より何時まで此間の休息は何時間午後は何時より何時までにして其間の休息時間は幾何位と約定して其習慣を失せざる様にすへし尤も農業の仕事は他の者と異りて時間的のみに行かざる事はあるべしと雖大約其時間を定めて是を行ふの習慣を造る事肝要なり執業中は孜孜として働き休息となればゆつくりと休み湯を呑み烟草を喫ふ勝手たるへし休日は地方の習慣に據るを妨げずと雖兎に角働く日と休む日とを確然定め置き働く日には確かりと働き休む日には又全く休むべし善く勉め善く遊ぶの習慣は今日殊に田舎農民に必要なりと信す日

備等を使ふ時は尙更其注意を要す彼等にして働かしめんと欲すれば  
 須く先休ますべし壓制を以て人に勞働を強ふべからず壓制すれば厭  
 々ながらに働く己自進みて爲すと厭々ながらになすとは其効果に於  
 て雲泥の差異あり余は農民保護として執業休務に關する訓令の如き  
 は當局者に向ひて何よりさきに請求したきものと信す實に執業休務  
 は彼等農民の風習上重大なる關係を有するものなり害虫の驅除とか  
 肥料の検査とか目前の小事に拘泥するは抑末なり請ふ彼等をして今  
 少しく規律あらしめて所謂人間らしき人間たらしめよ文明の人間は  
 規律の間に生ず

### 第六節 婚姻に關する改良

婚姻は人生の一大事なり其之を鄭重にし張美にするはもとより至當  
 の事なり然りと雖物各其度あり之を超ゆべからず之を超へては禮に

して禮にあらず道にして道にあらず元來田舎民の癖に無きものをあ  
 るが如く空しきを盈つるが如くするの風あり醜を掩ひ美を現はすは  
 日本人の性格にして審美思想の發する所誠に可なりと雖徒に假勢を  
 張り虚飾に流るゝは不可之より大なるはなしそれとも都會の人間は  
 入るを計りて出るを定め身分を顧み財力に據るが故に甚しき不都合  
 はなしと雖田舎民に至りては情の溢るゝところ理の靈格なくために  
 出費額の豫算を立つる事を知らずして徒に張り合に勉む故に結婚の  
 ためには多くの負債を生じて遂に家具家什までも賣らざるべからざ  
 る悲運に陥るもの尠からず殊に女子の家にては徒に數百千金を費し  
 て衣裳を作り身分不相應の拵に後腹を苦がらすもの之を普通となす  
 如此双方の親達が負債までして後世大事と念の上にも念を入れて鄭  
 重に溢美に舉行したりし婚姻も何時の間にかやら双方の我儘が現れ來  
 り嫁の里行きには何時もながら姑の悪口が土産となるに至り子を思

ふ親の心は皆一つも二もなく左様かと信ずる親は歸つてしまへ居られぬ處に無理に居れとはそりや無理よ縁が無いなら早いがよろしなど甘言かんげん以て迎ふるものから娘は愈甘ひを生じ何時までたちても夫の家に歸らぬ事となるそれより再三再四の迎が來り媒人親戚の取持ちとなり止むを得ずして一度は歸るしかも間もなくあとに引返す如此にして數度に及べば双方共に厭や味を生じ氣を腐らして遂に離縁に及ぶ初めの騷動費數千金は實にそれ水泡すゐぱうに歸し終はんぬ如此にして二回若くは數回の結婚に多くの費用を投じたために家運漸く傾きて遂に失産しつさんに至る誠に考へざるの甚しきものと謂ふへし必竟するに子女年齢猶少加ふるに教育に不足にして且經驗けいけんに乏しきを以て未社會の眞想しんきやうを看破かんぱする事能はざるものあればなり俗に他人の鹽を嘗めたるものにあらざれば役に立たずといふが誠に然り日本人殊に田舎民は兎角うまかどに引籠りひきこも的にして就中婦人の如きは都會にても出て、諸種

世上の事物じよぶつに觸接しよくせつする事甚稀しんせきなるを以て從て識見しきけんに乏しく浮世うよ困難こんなんの味を知らず故に己の生家を以て無上至極の安樂園あんらくえんと思惟しゆいし何時までも子供心を去らざるなり故に彼等をして彼等結婚けつこんに要する費用殊に女子は衣服調整いふくていせいの半費を割わきて之を教育に施せ教育あり見識けんしきある者いかで猥みだらに結婚けつこんし又猥みだらに離婚りこんするものあらんや婚姻こんいんの禮は人生の一大事なりしかも如何に鄭重ていじゆうに之を扱とひ莊麗せうれいに之を行ふありと雖其完成は全く双方の和合わがわにありて存す意志いし爰こゝに執着しやくちやくせず感情かんじやうこゝに融ゆ和わせさらんか折角せつかくの盛舉せいぎよ亦徒またに水泡すゐぱうに歸せんのみ猥みだらに彼等の衣を飾かざる事なかれ彼等の頭を粧よそふ事なかれ彼等を他家に嫁かすに百圓の衣裳いさうを持さなくとも少くとも彼等に高等小學校卒業證書の一枚位は持たしめよ又猥みだらに早縁さうえんを誇ほる事なくして寧智ちやうち藝げいの熟達じやくたつを誇るべし血統けつとうを糾索きうさくするはよししかも其邪狐淫咀じやくこいんそを以て良縁りやうえんを失ふ事勿れ其他儀式ぎしの如きも全舊慣ぜんきうくわんを打破たはすへしとはあらねども滑稽くわき形式けいしきに類する

が如き者は可成早く廢すへし醜業婦をして賀杯に干からしめ人足に酒を無理強ひする等は最も慎むべきの事なり

### 第七節 葬式に關する改良

死せる人を祭るは生ける人に安神を與へんがためなり佛教に所謂亡者の冥福は生者の祈禱善根によりて享有せらるゝ者なりとの事は未俄に信すへからず兎に角に人苟生活の機能を停むれば即幽瞑事を辨せざるに至る之に事へ之に供養す亡者何の感かあるたゞ祭る者及やがて祭らるべきものゝ安心立命に關するあるのみ故に葬式の如きも亦分外突飛の盛裝を避けて可成謹慎に且最莊嚴に施すへし日中葬式の行列はあまり面白からず棺輿の粧飾亦甚しく華美なるを要せず造花流其他の供物等亦必ずしも盛にするに及はざるなり之を葬り之を祭るたゞ殉に至誠のあるあれば足れり然るに近來田舎にては少し

く財産ある家にては殊更に都會の風を眞似びて葬式の時に數輛の車を雇ひて之に乗り以て棺を送るものあり平時急用他出の際こそ之を利用するはよけれ平常之を利用せし事もあらざるものが殊更に葬式の際に至りて之を用う蓋又其盛葬を誇らんがためならずや誠に甚しき間違なり又ゆかりもなき赤の他人をして殊更に會葬せしめて其行列の盛なるに誇るものもありために少しの同情心もあらざるものががや／＼と何事かさわざつゝ後に従う様丸て祭例の時に踊り屋臺に付き纏ふが如し種々の服裝をなせる者が旗を立てゝどや／＼と押しかくる様は丸て軍人の歡迎に於けるが如し夜中多くの提灯を掲げ誦者をして念佛を唱へしむる様は宛も結婚の時人足の孫節を歌ふに似たり其騒々しき事不規律なる事及浮華誇張の風ある者何れの點よりして之を見るも痛惜哀悼の情の現はれたる者あらず田舎の人間は悲しとて眞に深く悲むにあらず嬉しとて眞に深く嬉かるにあらず彼

等に實は時々刻々變轉窮りなき感情のため能く泣き能く笑ふ泣くときは人目も何もあらばこそ悲叫を放ちて泣き悲む併も又忽ちにして能く笑ふ故に僅々數刻の葬式の間猶能く悲哀の感に打たるゝ事なし葬式の嚴肅ならざる之を以ても知り得べし葬祭婚禮は一生の大事なりしかも虚禮に流れ張華に陥らは徒に混亂紛騒を來すのみにして喜憂の眞髓を失すべし希くは此精神を以て可成早く改良の緒に着かんことを今一々之を細舉するに違あらず

### 第八節 宴會の改良

田舎民のする事はなにも長し彼等はなか／＼に忍耐に富み且氣力に堪能なり殊に酒のためには倒れて而して後止むの精神を有し以て三日三夜位も飲み續くる事あるは誠に感服のいたりなり普通の祭例及夏忘秋忘等にてても三日位は常なるを況して子供の誕生帶直大

人の四十二六十一八十八等の賀の祝或は婚禮等に至りては五日位も續け様なる事あり是がために費さるゝ時間費用勢力は實に莫大なるものなり又彼等は酒の如き飯の如き人を招く時は無理に強うるの風あり酒嫌ひなる人の無理に強いられて或は吐き或は下し遂に疫病と變し近隣までも迷惑を及すこと等其例に乏しからず彼等は強うるを以て馳走の道と思ひ響應の體と信ず又彼等は命取らるゝやうにても強あらるゝまゝに以て食ひ以て酔ふ何等の惡風や彼等は日常我々として働き餘裕なきものなれば年中の農隙を利用し夏忘秋忘などと稱して親戚相集ひて宴會を開く事あり彼等は是を以て誠に夏を忘れ秋を忘るゝものなり彼等の頭は是がために一新せられ彼等の骨は是がために一休せらるゝものなり又是によりて彼此の意志を融通し諸種の智識を交換し舊交を温め來誼を謀る誠に結構の事とすたゞ可成宴會に要する時間を一定し事の宜さに留むるを以て肝要とす又彼等

は賭け食と稱するものをなす事あり例へは豆腐を二十丁食はしそれ  
 だけはあごらん酒一罇を續け様に飲まば買はん或は別に酒幾ら肴幾  
 らを與へんなどとて其飲食する處を見て與するなり是がため隨分生  
 命を失ふ事さへ少からず嗚呼又何たる蠻風ぞやかゝる馬鹿氣たる事  
 は宜しく速に全滅せしむへし  
 以上はたゞ衛生上と經濟上の二點より其改良の必要なる事を論じた  
 るまでなるが尙一つ必要なるは風儀式の事なり田舎人の癖に生肴が  
 居らねば酒が飲めぬといふ生肴とは何ぞや婦人なり正月の爆竹六月  
 入の荒神祭等には老人を殘して家族一同が悉く集合する時なるが男  
 女混合の宴會なれば自分の妻たらんが他人の妻或は娘たらんが年老  
 いたる婦人たらんが或は杯をさし肴を取り合ひ抱き合ひ押し合の醜  
 態を演ずること田舎宴會の常なり又或は醜業婦を招きて飲めや騒げ  
 やの大騒動を演じ終には見るに忍びざるの醜態を現はし而して願み

ざる者殆田舎の名物の如し嗚呼又何たる風俗ぞや田舎の宴會につき  
 ては經濟上衛生上の外風儀上の改良をなさざれば彼等は到底野蠻人  
 として長く卑賤の地位を脱する能はざるなり要するに時間と馳走の  
 量を節し而して必婦人を呼ぶ勿れ若男女共同の會合ならば猥褻に陥  
 らざる様心掛くべし今日の宴會は實に衛生上經濟上及風儀上の三方  
 面よりして改良の急務なるものありて存ず就中其最急切なるは最後  
 のものなり

### 第九節 公會堂の設置

田舎農民が如斯衣食住に關して没趣味不規律體體なるは蓋社會の  
 刺戟に乏しければなり彼等は山川草木の關係により山谷平野の間に  
 點綴して一戸若くは數戸を以て一の小社會を造る故に彼等の思想は  
 單純に彼等の感情は偏僻なり彼等若一部落一鄉村のために相寄り相

談ずる事あるや議未何たるを知らざる中に早已に仕出屋の料理の香を知る彼等の會合は酒を以て始り酒を以て終る彼等は上より之を見てかくなせ或は之を取りきめて出すべしなど命せられたる時にこそ村長區長の命によりて寄り集ふなれしかも其寄り集ひたる時は酒を飲み杯を取廻して歸るのみ彼等の公共心に乏しくして且社會的知識に乏しきや知るべきなり故に彼等には他人なく他愛なく他物なくあるものはたゞ自己と自利と自物とのみ已れだに除かにや小人數がよいといふ事は獨馳走の時のみにしもあらざる様なり故に彼等をして社交的動物たる本能を發揮せしめ社會的感情の調整を謀る事あらば彼等の思想界は愈擴充せられ彼等の感情は優美にしてしかも公共的となり彼等の意志は自己に偏在せず事宜によりて働き従ひて彼等の生活は益高尚に愈純潔に赴かん是實に其如此ならしむるために公會堂を設置するの必要あるを見る

公會堂は彼等の公談場にして彼等は之に集りて談話し討議し演説すべし  
公會堂は彼等の共同遊戯場にして彼等は公會堂の庭園に集りて角力擊劍柔術體操テニス、ベース、フット等を行ふべし  
公會堂は彼等の共同宴會場にして彼等は是に集りて極神聖なる規律ある宴會を開くべし彼等は是を以て私人宴會の模範とすべし  
公會堂は彼等の展覽會場にして彼等は毎年春秋の二期に於て農産物の共進會を開催すべし  
公會堂は彼等の音樂及舞踊會場にして彼等は時々是に集りて高尚なる音樂及舞踊をなすべし  
公會堂は彼等の幻燈會場にして彼等は時々幻燈會を開催して其映出せる繪畫によりて幾多の知識を獲得すべし  
公會堂は如此彼等に取りて有益缺くべからざるものなり昔希臘羅馬

に設けられたる公會堂が如何に彼國文武の發達を催したりしやは誰人も知る所なり古來歴史に鑑みるに一國の文明は其國人民の公共心によりて發達せり日本の如く小部落小社會にては未到底文明的地歩に達するや遠しと謂ふべし然るに是等に關して未何等の命令訓示の發せられたるあるを聞かず害蟲驅除に關する事肥料に關する事の訓令の如きはもとより必要なりしかもまづ彼等をして根本的に一國人民の主幹たる要素を備へしめよ彼等は此要素によりて幾多の經營劃作も自にてなすべし虫を取れ田をなほせとは三つ子の小便をさゝくるに均しくなか／＼の世話なり日本人のくせとして公共心に乏しが上にも當局者までが此點に向つての注意を欠ける事誠に慨嘆に堪へざるなりとかく社會の人間は田舎の金を絞りて是を繁華の土地に用ふる事多く未一國の主民たる百姓を大事にする事を知らざるなり其根を養はずして枝を養ふ抑育者の作業なり二十世紀に於ける新日

本の救世者は劈頭第一にまづ彼等農民を憐むへし可愛い子には旅をさせ可愛い農民には公會堂を設けしむへし

### 第十節 物産共進會の開催

物産共進會が産業界に與ふる利益の鴻大なる事は今更申し述ぶるの要なく今や縣郡の共進會は到る處に開設せられて漸次隆盛に赴かんとす是時に當りて村の共進會を開く事又誠に緊要の事と信ず村の共進會は毎年一回秋期收穫後の農閑期に於て開設し其村に於ける農産物を公會堂に蒐集陳列し以て各自種子の交換及栽培方法の聞き合せ等互に鼓舞獎勵して經驗創作に資せんとするにあり是が委員は村役場に奉仕する村吏員を以て任じ些少の手當を給すれば足れりとす陳列に要する机箱掛臺の如きは材料を各人の寄附に任じ工役も亦有志の寄附にすれば格別の費用を要せずして事纏るへし兎に角之を開催



する事の必要なるは地方に於ける産業の發達上如何ばかりの効果を奏するや知るへからず殊に縣郡の共進會の如きは遠方婦人までが一堂出席して見るといふ事は實際に出來かぬ事なるに今日生活の上進及農事の改良を謀る上に於て婦人の知見を擴張する事實に誠に切要なるものあり故に先村の共進會に於て是等婦人子供及頑固なる老人にまでも自由に觀覽せしむる事實實際産業上の改良進歩に如何ばかりの利便ありや知るへからず

### 第十一節 幻燈會の開催

田舎農民を教育するには具體的にして且近接なる事項を以てせざるへからず是點に於て幻燈が其好材料たる事は言を俟ざるへし幻燈に映出する繪畫は衛生教育風俗歴史人物理科農事等あらゆる方面に涉るへし彼等が實際に未嘗て見し事も聞きし事もなきものが屢此幻燈

によりて映出せられ彼等の活潑なる想像力は進みて之が把住に勉め従て彼等の頭腦をして普遍的に多方的ならしむる事を得へく又彼等の風習の矯正及農事の改良に資せしむる事を得べし老人舊慣の頭は之がために改良せられ婦人智識の狹隘は之がために擴充せられ子供は之を見て喜び且智徳修養上に幾多の効利ありや知るへからず幻燈畫の説明は學校教師若くは村役場吏員或は有識の人に依頼すべし幻燈會は少くとも春夏秋冬の四回は開催すへし期日は二日續きの休みを利用すへく時間は夕暮より始め大抵十一時頃までにて終るべし

### 第十二節 共同的遊戯の獎勵

共同的遊戯は共同心發達上唯一の良法なり小學校に於ける遊戯の價値は近來多くの人に承認せられて種々の遊戯法が研究せらるゝに至れり然るに壯年以上の人にして體操遊戯をなすもの田舎にては殆皆

無と謂ふへし共同的遊戯は愚か個人的遊戯だになすものなし共同的遊戯には角力、擊劍、柔術、テニス、バスケット等を奨励し毎休日には必此公會堂の庭園に集りて此等の演技を施行すべし初は聊子供氣たる感あらんなれども馴れては却て興味を覺ゆるに至るべし春秋二回は等の演技大會を催すべし大會の費用は郷村の負擔とす是等の演技のため彼等は最健全に最優美に且最公共心に富む様に至るべし

### 第十三節 共同組合の設置

彼等は既に種々の場合に於て公共心が發達するに至れば自然共同事業を企劃するに至るべし農事の改良は共同事業に俟たざれば能はざる事あり例へば耕地整理の如き害蟲驅除の如き水路設置の如き又副産製造の如き然り組合を分ちて産業組合、耕地整理組合、害蟲驅除組合、灌溉引水組合、購入組合、消費組合の六種とす

産業組合は楮、檜木を集積して製紙をなし茶葉を集めて製茶をなし或は牛乳を集めてバターを製するが如く副産製造に關する組合を曰ふ耕地整理組合は耕地の整理をなすがための組合にして是は目下甚重要なる事に屬す  
害蟲驅除組合は害蟲驅除のため或は誘蛾燈を使用し畦畔の燒拂ひを行ふを曰ふ

灌溉引水組合は池を掘り堤防を築き溝渠を通じ樋口を造る等灌溉に關する組合を曰ふ  
購入組合は肥料、器械等の購入のために設くるものなり  
消費組合は農家の消耗品を安價に買入れ共同分用するの組合なり  
農事上の組合が設けらるゝに至らば田舎農民の共同心は既に發達せられたるものにして是と同時に彼等の生活は一般に高尚に赴き優美になり従ひて彼等の品格は一層に昂軒するに至るべし

### 第六章 括論

吾人はまづ農民の心性發達の甚幼稚なる事を論じ従ひて彼等生活の程度亦甚劣悪なる事及彼等の風習の卑醜なる事を論じ最後に彼等生活上に於ける改良意見の一斑を附説し終れり其論する處奇嚴酷薄大に彼等の下等民たる事を放言して憚らざりき而して論述の間極論痛罵非常に壯快を覺えたりきしかも書き終て翻讀すれば吾人は悲情轉來再之を讀むに忍びざるものありて存せりあはれ彼等にして如此風習の卑醜なる如此生活の下等なる要するに智なく識なく蠢爾たる事蝸蟻の如くならしめたるものは抑何人なるか愚民を攻むるは易く賢人を御するは難し然りと雖愚民何時までも愚民たりはた愚民たるべきか時勢の變遷は其來る事怒濤の如く疾風の如し得て人力の如何ともすべからざるものなり故に愚民なりとて一概に卑下し又一偏に見

下ぐべからず一寸の蟲も五分の魂ありとかや人誰れか情なからん感情の湧發する處遂に又抑制すべからざるものありて存す明治維新は實に彼等あはれなる農民をして人權の自由を得しめ一般教育の恩典に浴せしめ給へり彼等はこゝに於て始めて從來掩閉せられたる沃雲を攪散して再春光影麗かなるの天日に遭ふ事を得たり是と同時に彼等はこゝに始めて昔なからの愚民を悔いて早くも賤民の境を脱せん事を欲するに至れり然りと雖も因習の久しき今日と雖も尙農民は一般に卑賤視せられ又自卑下するもの多し嗚呼彼等の生活の寒貧なるも彼等の風習の卑醜なるも其由る處獨り彼等に留らず彼等とて敢て好みて惡衣惡食に甘んせんや又求めて下等なる風習をまなばんや蓋今日彼等境遇の止むを得ざるものあるに由れり古來士農教育の懸隔は慥に今日貴賤の隔差をして甚しからしめしもの彼等生活の狀態の憐むべきものある所以なり請ふ彼等に向つて徒に衣食住の高尙なる

ものを求むる勿れ又徒に悪風悪習を以て責むる勿れ彼等は今や自然に社會の刺戟によりて生活の高度を欲し風習の優美を希ふ是がために彼等は常に經濟界に於て窮困に迫り憂慮に悩みつゝあり而して彼等は未財を求め貨を殖やすの法を知らざるなり換言すれば彼等には教育少く識見乏しきを以て未改良を謀り進歩を期するの道を講ずる事を知らざるなりあはれ彼等は今や社會の物質的文明と戦ひ生存競争場裡に彷徨ひつゝあり而して其虛に乗するもの富者あり貴人あり彼等の財を兼併し彼等の勢力を横奪す知らず彼等の氣息奄々僅に餘命を保ちつゝあるもの其壽果して完きを得るや否や吾人は實に天下幾千万の憐れなる彼等農民をして九死の中に一生を拾ひ助けん事誠に目下の急務なりと信すあはれ天下の血あり涙ある慈仁の人よ希くは彼等不憫の農民に對して一片の同情を表し一掬の涙を灑がれよ諸君の功德はたゞに一世一代の現世に留まらざるべし

明治三十五年五月十一日印刷  
 明治三十五年五月十五日發行

農民の社會教育

定價金貳拾錢

著 者

井 上 龜 五 郎

發行・兼  
印刷者

金港堂書籍株式會社  
 東京市日本橋區本町三丁目十七番地

代 表 者

右 社 長

原 亮 一 郎

東京市下谷區龍泉寺町四百十四番地

印 刷 所

惠 愛 堂

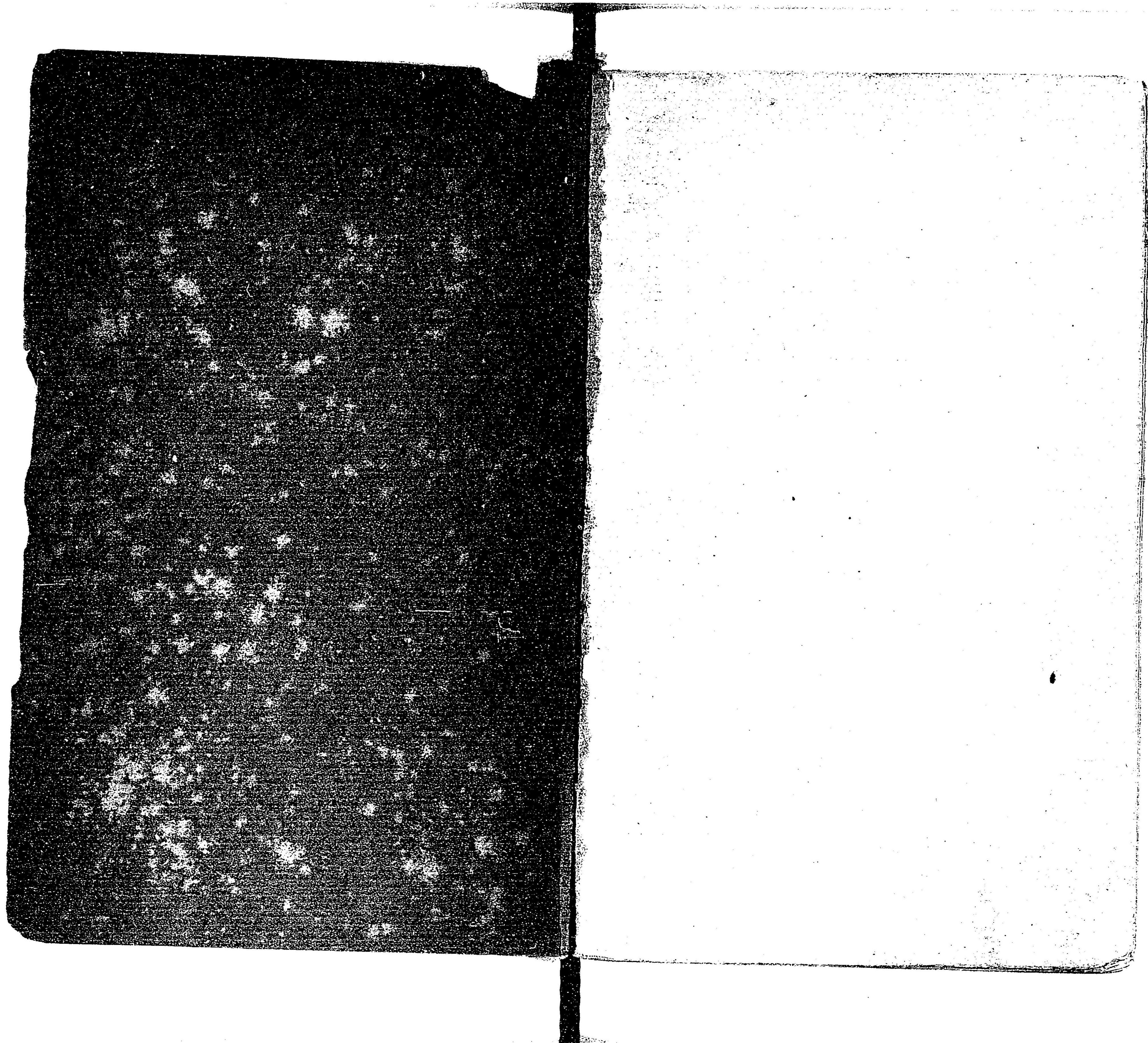
東京市麹町區内幸町一丁目五番地

賣 捌 所

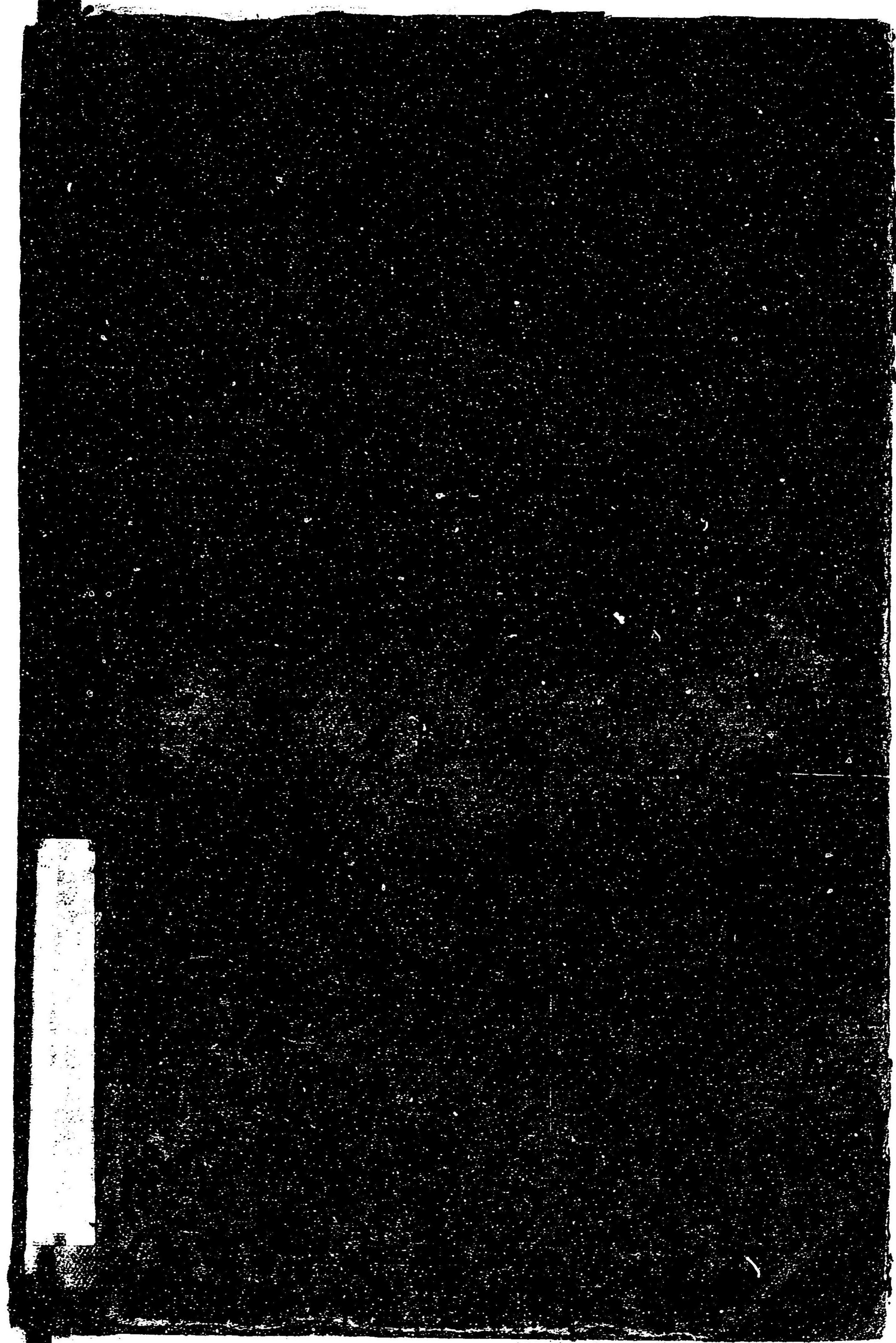
各 府 縣 特 約 賣 捌 所

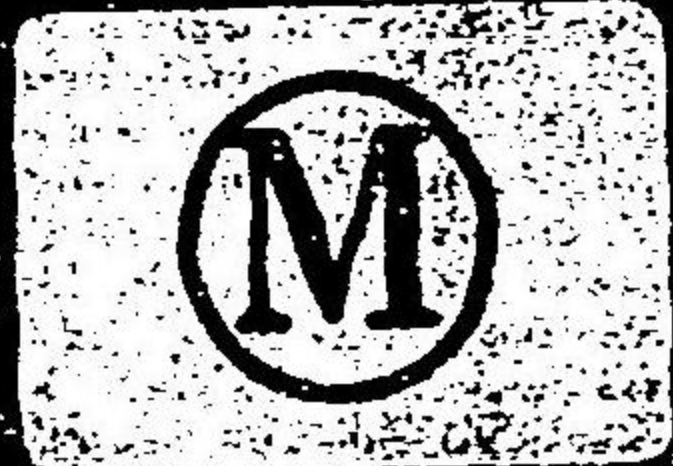
不 許 複 製

3/36



82  
457





048534-000-4

82-457

農民の社会教育

井上 亀五郎/著

M35

BEI-0076

